訂修

# 女子國文新選

七

4b
810
昭4

42261

教科書文庫

4
810
42-1929
20000
67121

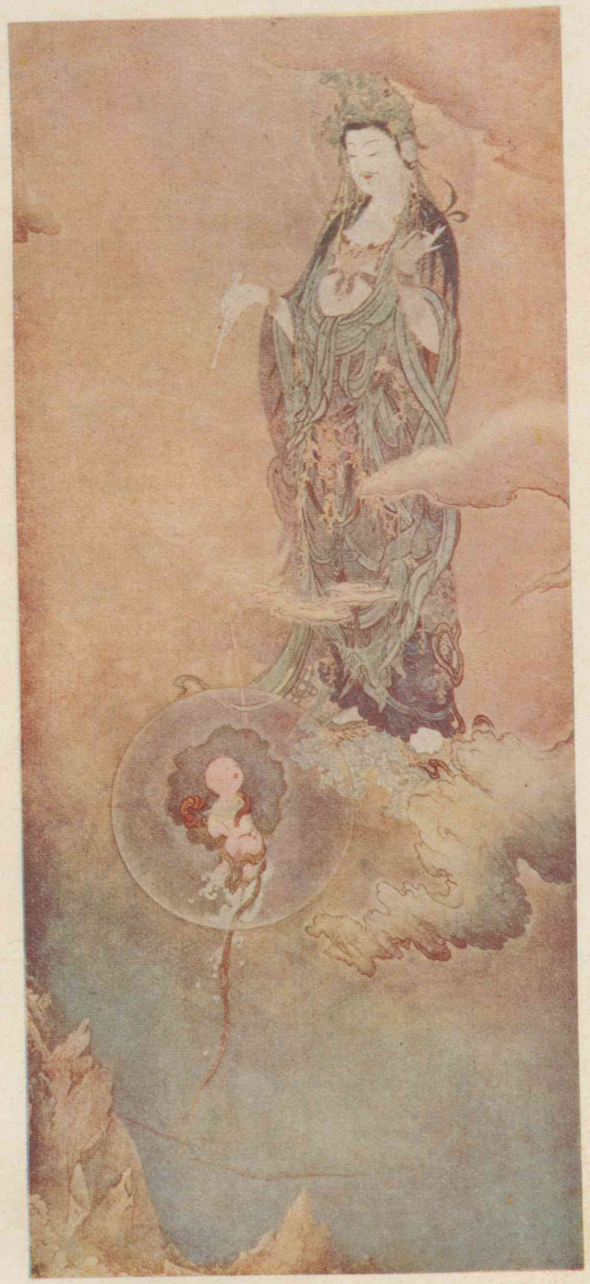
資料室

昭和四年三月二十七日
文部省檢定濟
萬等女學校國語科用

# 吉澤義則編
# 修訂女子國文新選

廣島大學
教
67121
図書

4b
810
BBK



慈母觀音（狩野芳崖筆）

修訂

# 女子國文新選 卷七 目次


一 若き日本の使命 …… 中村孝也 …… 一
二 天長節の由來 …… 萩野由之 …… 五
三 月雪花 …… 芳賀矢一 …… 一一
四 保津川下り …… 夏目漱石 …… 一九
五 風の音 …… 幸田露伴 …… 二四
六 晩春の別離 …… 島崎藤村 …… 二八

七 愛兒の記念 藤岡作太郎 …… 三六
八 ことばのうみのおくがき 大槻文彦 …… 四五
九 淨瑠璃寺への道 和辻哲郎 …… 五一
一〇 表現について 相馬御風 …… 五八
一一 巡禮唄 近松半二 …… 六四
一二 鞭打つ者、鞭打たるゝ者 吉田絃二郎 …… 七一
一三 徒然草 吉田兼好 …… 七六
一四 自然禮讃 野口米次郎 …… 八三
一五 亞浪俳話 臼田亞浪 …… 九三
一六 天明の俳句 諸家 …… 一〇一
一七 松江の曉 小泉八雲 …… 一〇三
一八 田園雜感 吉村冬彦 …… 一〇九
一九 麒麟 谷崎潤一郎 …… 一一七
二〇 論語抄 論語 …… 一二八
二一 東海道五十三次 笹川臨風 …… 一三一

二三 落花の雪 太平記……一三七
二三 村上義光 太平記……一四三
二四 熊王の發心 隱士松翁……一五三
二五 月明の夜友に 德富猪一郎……一五八
二六 月夜の美感 高山樗牛……一六三
二七 長良堤の訣別 坪内逍遙……一七三


―終―



# 修訂 女子國文新選 卷七

## 一 若き日本の使命

中村孝也

歷史は長し。されど、國は永へに若やかなり。
仰ぎ見る神武の大帝
建國創業より茲に、二千五百八十有八年。
人は去り、世は移ろひ、
世紀はいくたびか旋り行きつ、
寄せては返す榮枯の浪に洗はれて、
群がり起れる英雄の追憶、

中村孝也
群馬縣の人、明治十八年生、文學博士、東京帝國大學史料編纂官、同大學助教授。

二千五百八十有八年
昭和三年。

夢の如く淡く消え行けども、
潑剌たる日本民族の大精神は、
時を重ねてます〳〵その光彩を發揮す。
見よ、悠久無限のあなたに、
燦として輝く神祖の御姿、
聽け、朗々たる無韻の大御言葉、
大宇宙の靈氣を浪だたせて來るを。

豐葦原の千五百秋の瑞穗國は
わが子孫の君たるべき國なり。
爾、皇孫就きて治らせ。幸くませ。
天つ日嗣の榮えますことは、
天壤のむた窮まりなかるべし。
壯なるかな、天軍一齊に歡呼の聲を擧げて、



廣大無邊なる神德を讃美す。
いかに偉大なる宣言よ。
いかに雄渾なる斷定よ。
天日の遍く照らし給ふところ、
自由と愛と光明と希望と、
生々發達の悅び全世界に漲る。
その高尙なる道德性に照らされて、
わが民族の使命は夙に指示せられき。
起てよ、全人類進步の先頭にあつて、
平和の使者たること、卽ち是れ
我等の存在を聖ならしむるものにあらずして何ぞや。
汪洋たる東洋文化の潮流と、
澎湃たる西洋文化の潮流とは、

今や相寄り相融合して、
渾然たる世界文化の大潮流をなしつゝあり。
この新なる生活を指導するものは果して誰。
東海、國あり。永への青年。名は日本！
建國以來二千五百八十八年の歴史を有して、
連綿たる皇統を戴ける國民の若々しさ。
新時代の喇叭を高らかに吹奏しつゝ、
平和と愛と悦びとの花瓣を撒きちらすところ、
神勅は輝く。

上は則ち乾靈國を授くるの德に答へ、
下は則ち皇孫正を養ふの心を弘む。
（神武天皇即位詔勅の一節）



萩野由之
新潟縣の人、大正十三年歿、文學博士、歴史家。
今明治四十四年。

## 二　天長節の由來

萩野由之

我が邦で天皇の御誕生日を祝し奉ることは、光仁天皇の御時が始である。寶龜六年といへば今より一千一百三十五年の前である。その年の九月に勅命があつて、「來る十月十三日は朕が誕生の日である。いつもこの日には感慶兼ね集まるによつて、諸寺の僧尼をして、毎年此の日には經を轉じ道を行ぜしめ、海内の諸國はすべて屠殺を禁止し、内外の百官には、酺宴を賜ふこと一日たるべし、仍つて此の日を天長節と名づく。庶くは斯の功德を廻らして、先慈に虔奉し、此の慶情を以て普く天下に被らしめよ。」と仰出されたが、さて十月十三日に至つては、勅定の如く天下に大酺し、群臣は翫好の物や酒食を奉獻し、宴會終つて後には、夫々に祿を賜はつたとある。これが日本における天長節の始、又天皇の御誕生日を祝

し奉る始である。

さて支那の例を見ると、唐の時には、中宗の頃から天子の誕生日には宮中で宴會があつたが、玄宗の開元十七年から千秋節と名づけて、天下一般の慶事となされた。此の千秋節の名は後に天長節と改まつた。我が寶龜六年は開元十七年からは四十五年ばかり後であるから、多分この唐の風を聞し召しての御事であらう。

此の勅語に、感慶兼ね集まると仰せられたのは、人の情として誕生日には、母の我を生んで苦勞したまうた事を思ひ出して、感情の起るものであるから、其の生母の在さぬ後では、一段と風樹の感を增すことである。よつて佛教の盛な時代には、殺生を禁じて僧尼に讀經せしむる事となる、卽ち斯の功德を回向して先妣への追善とする、これ亦御至孝の情である。

又一つには、我が御一生を祝福し給ふが爲に、人々と共に酒宴を

風樹　樹欲レ靜風不レ止、子欲レ養親不レ待。（韓詩外傳）



先帝　明治天皇。

開いて、一日の歡樂を極めなされるのも至當の御事であるから、感慨と同時に慶事も伴なふわけである。

天長節のお定めが唐の制に倣はせられたにもせよ、誠に昭代の美事とおもはれるのに、その翌年卽ち寶龜七年に引きつゞき行はせられた後は、一向に記錄に見えぬこととなつた。全く絕えたのであらう。

然るに先帝の御代に至つて、明治元年八月二十六日の布告で、九月二十二日の御誕辰に天長節を執行あらせられる旨を達せられた。太陽曆を用ひるやうになつてから、月日を換算せられて後は十一月三日となつたが、ともかくも光仁天皇のお始め遊ばされた慶典が、一千一百年の後に再興せられたのである。

かく天長節として再興せられたのは明治元年であるが、その萌は孝明天皇の御時にある。元治元年四月といへば、世の中は勤王

討幕論や公武合體論などで、鼎の沸くやうな騷ぎの時であつたが、幕府は朝廷御尊奉の實を擧げる爲に、十八箇條の奏聞をした。その中に天皇の御誕辰の六月十四日には、處刑を停止すると申す事がある。

抑、幕府では、將軍の重き祝日には、當日と前日とには處刑を止めた事は享保以來の例となつてゐたのに、天朝の祝日には、この事に及ばなかつたから、今度この改正を申出たのである。これは勿論御祝日として祝賀し奉る例とはならぬが、天皇の御誕生日を、重き祝日とし記念すべく定めた起原とはなるであらう。

さてかやうなめでたい祝日が、光仁天皇の御時までなぜ行はれなかつたか、又それが何故に程なく中絶したかは頗る不審であるが、全體皇室を始め奉り、貴族も民間も、赤兒の誕生を祝ふことは鄭重であるが、誕生日を祝ふ風習は殆ど行はれなかつた。



誕生の際の祝賀には、樣々の儀式があつて、皇室におかせられては、初夜、三夜、五夜、七夜、それから五十日の祝、百日の祝がある。貴族も之に倣ひ、民間でも簡略ながら之を祝ふ習はしであつた。百日の後は、三歲、五歲、又は元服の祝はあるが、それも生日を祝するのではない。其の後はずつと飛んで滿四十歲の時に祝賀をする。年としては餘りに早いが、五八の賀といつて奈良時代から行はれて、平安時代には最も盛であつた。この後は十年毎に五十の賀、六十の賀、七十の賀、八十の賀、九十の賀まである。

かくの如く、天皇の寶算を賀し奉ることや、又は天皇が太上天皇の寶算を賀し奉ることについては、それ〴〵その式次第を定められてあり、又實際記錄にも實例が見えてゐるが、かやうな御年賀にも決して御誕生日をもつて其の日とは定めてない。多くは三月にする習であるから、これを見ても人の生日を記念するといふ考

は乏しかつたと思はれる。

民間の俗傳には、年賀を正二三月に祝ふを花の賀といひ、四五六を扇の賀といひ、七八九を紅葉の賀といひ十、十一、十二月を雪の賀とした。例へば寅卯辰の年は正二三月の内に、巳午未の年は四五六の中に、我が生まれた年日を祝ふだけで、生まれた月日を記念して、年賀をすることはなかつた。一生の間に幾度もない年賀さへ、誕生日には拘らぬ風習であるから、生日を祝する風習は、昔は皇室にも民間にも甚だ少かつたので、折角の慶典も一時中絶するに至つたのであらう。

（史話と文話）

天皇は日月の如く、
萬古變遷なし。（皇統歌の一節）



芳賀矢一
福井縣の人、昭和二年歿、文學博士、國文學者。

# 三月雪花

芳賀矢一

煌々たる活動の日の光が西に沈めば、玲瓏たる一輪の月が休息の夜を照らす。月の光は溫和で、日光のやうに峻烈でない。日は赫々として仰いで見ることも出來ないが、月は眺めて親しみ易い。太陽が一たび出れば、群陰は皆影を伏し、大小の有象無象は悉く照破されるが、月輪は萬象を一つに包んで、貴賤貧富の差別を失はせてしまふ。月の光は慰安の光である、慈愛の光である、炎熱を伴はない清冷の光である、皎潔・無垢・崇美と稱へるべき優しい光である。休息・安靜の夜には最もふさはしい。この光に對しては、誰しも人生の慰藉を感じ、詩的情緒が油然として涌く。晝間は猛獸と鬪つてゐる熱帶の野蠻人でも、月前の歌舞に終日の勞苦を忘れる。熱帶の椰子の蔭、寒地の氷の家、眺める人の心々は違ふであらうが、

うちむかふ云々　荷田蒼生子の歌。

隈なく世界を照らす月光が人の胸懷にしみ渡ることは、恰もその影が千草の露の玉毎に宿るやうである。「*うちむかふ月は一つの影ながら浮かぶは千々の思なりけり。」である。

秋の月

東西古今、悲喜哀歡の情熱は、幾萬回となく幾億回となく、この光に向つて訴へられた。これを嗟歎し、吟詠した詩歌の感吟は、世界各國の言語に充ち滿ちてゐる。天文學者はいふ「月は地球の衛星で、全く死んだ冷塊である。」と。このつめたい光が、古往今來どれほどの暖かみを人間に與へ



花ならば云々　僧仙覺の歌。（新續古今集）

三千世界云々　唐の詩人白樂天の詩の句。

たか、また現に與へてゐるか。月は永久に人間の良友である。雪は月よりも一層つめたい。貧富・貴賤の差別なく、その純潔な色を以て乾坤を一つにすることは、月に似た點が多い。高樓・茅屋も皆同じ色に埋められる。

花*ならば咲かぬ梢もまじらまし
なべて雪降る三吉野の山

といふやうに眼に入るものは悉くその下に包まれてしまふ。

*三千世界銀成色ヲ
十二樓臺玉作層ヲ

の美觀は一切の人間界の醜を掩ひ去つて、人をして廣寒宮裏に在るが如き感じを抱かせる。天から落ちて來るこの純白な色に比べては、地上の花も甚だしく穢く感ぜられる。霏々と散り紛々と飛んで、たゞ一條の川水を殘して、山といはず、野といはず、瞬く中に

瓊玉を敷く莊嚴の觀は眞に人目を眩惑する。よしや、薪炭の料に乏しい貧家の庭でも、美しいといふ感じは少しも變らぬ。花、紅葉色々の眺はもとより美しいに相違ない。花の散つた後の新綠の色も、目の覺めるやうな心持がするが、考へれば、花も青葉もない冬枯の時に、地上の萬物がこの銀色に掩はれるのは、眞に對照の妙、變化の奇、造化の巧を盡したものではないか。一年中蓮の花の開いてゐる極樂淨土は、決して我等の世界ほど樂しいものではなからう。

雪景

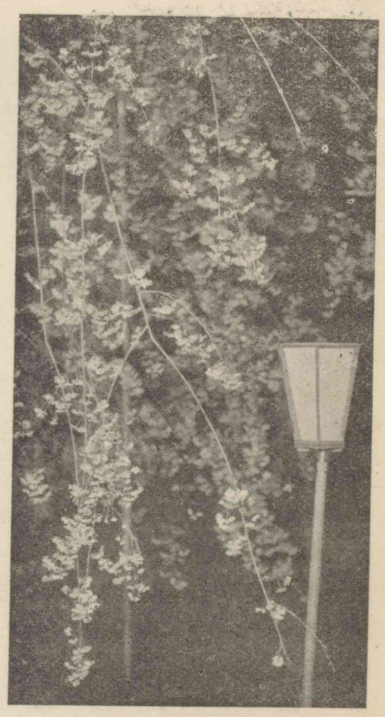


雪に埋れた銀世界が終つて再び百花爛漫の美を見ればこそ、春の價値は一層多くなるのである。月や雪はたゞ一色である。花のさま〳〵、どれを見ても美しいのが、四季につれてさき代り咲き亂れるのは、人生としてはあまりに贅澤な感じもする。花は美しい色の外に、芳しい匂さへ有つてゐる。我等の食用のために作つた菜や大根の花でも、無限の詩趣を備へてゐる。富貴の庭園に培ふ花の價を生じたのは無理もないが、山の花、野の花、いづれも月や雪と同じやうに、一錢をも要しないのである。若し人生に花がなかつたら、どれほど寂寞を感ずるであらう。閑寂を旨とする茶室の内にも、床の間に一輪の花は必要である。これはむしろ花を貴んで、その濫用を愼んだのである。棺槨を飾るにも花を以てし、墓前にも花を供養する。人は死んでも花と離れないのである。月雪の眺はその皎潔を愛し、その清淨を貴ぶが、花はその艶麗華美を

以て人生を飾り、人心を慰めるのである。花やぐ・花やか・花々し・華美・華麗・華奢などの語は、皆花に基づいた語である。古今東西の詩歌は擧げるだけ愚かである。余はたゞ、

年經れば云々
藤原良房の歌

山櫻云々
康資王の母の歌。



櫻

年經れば齡は老いぬしかはあれど
花をし見れば物思もなし

といふ古歌で、一切を總括することが出來ると信ずる。

月・雪・花三つの眺は各、その特徴があつて、いづれを前いづれを後といふことが出來ない。

山櫻花の下風吹きにけり



冬ながら云々
澤原深養父の歌。

笠は重し云々
謠曲、葛城の句。

アイスランド
北太西洋中の一島、面積三九七五六方哩、デンマルク領。

木のもとごとの雪のむらぎえ

これは花を雪に譬へたのである。

冬ながら空より花の散りくるは
雲のあなたは春にやあるらん

これは雪を花に譬へたのである。

笠は重し吳山の雪、靴は芳し楚地の花。肩上の笠には無影の月を傾け、擔頭の柴には不香の花を手折る。

これは雪を月と花とに譬へたのである。花を賞して月を愛せぬ人はない。月・花を愛して雪を賞でぬ人もない。

思へば世界の一部には全く花を知らぬ國もある。一年中氷雪に鎖されてゐるアイスランドでは、氷は卽ち人の家である。この地方には、寸紅の人の目を樂しませるものもない。またこれに反して、全く氷雪を知らぬ人もある。一片の布を纏うて生息する熱

帶の住民は、瓊玉を綴る奇觀は見たことがない。ガス・電燈の光に不夜城の觀を呈して、夜更を知らぬ繁華なロンドンの住民も、秋冬の半年は、美しい月の光を見ることが出來ない。我等日本人が、昔も今もこの三つの眺を擅にすることを得るのは、眞に天賦の幸福ではあるまいか。

月・雪・花の眺は、古人の歷史が加はつて一層の感興が增す。

世々を經て眺めし人の數にまた
我をも許せ秋の夜の月

月は古來の歷史を照らす鏡である。

年々歲々花相似（タリ）
歲々年々人不（シカラ）同

人生の感は花を見て益〻繁く雪を見て愈〻多い。二千五百年以來、月・雪・花三つの眺を有し得た我等祖先の遺跡は、いかに多くの感興を我等に傳へたことよ、いかに多くの追慕を我等に催させる事よ。

（月雪花）

世々を經て云々　伊藤仁齋の歌。

年々歲々花相似　唐の詩人、劉廷芝の「代悲白頭翁」の詩句。



夏目漱石　名は金之助、東京の人、大正五年歿、小說家。

保津川　大堰川の上流、急湍で名高い。

## 四　保津川下り

夏目漱石

うかれ人を花に送る京の汽車は、嵯峨より山を貫いて丹波へ拔ける。二人は、丹波行の切符を買つて龜岡に降りた。保津川の急湍を舟で下るのは、この驛からする掟である。下るべき水は眼の前にまだ緩く流れて碧油の趣をなす。岸は開いて里の子の摘む土筆も生える。舟子は舟を渚に寄せて客を待つ。

「妙な舟だな。」と友がいふ。底は一枚の板の平かに、舷は尺と水を離れぬ。赤い毛布に煙草盆を轉がして、二人はよき程の間隔に座を占める。

「左へ寄つて居やはつたら大丈夫どす、波はかゝりまへん。」と船頭がいふ。船頭の數は四人である。眞先なのは二間の竹竿、續く二人は、右側に立つのは櫂、左のは竿である。

ぎい〳〵と櫂が鳴る。岸は二三度うねりを打つて、音なき水を前へ〳〵と送る。重なる水の逼つて行く頭の上には、山城を屏風と圍ふ春の山が聳えて居る。逼つた水はやむなく山と山との間に入る。帽に照る日の忽ちに影を失ふかと思へば、舟は早くも山峽に入る。保津川の瀨はこれからである。

「愈、來たぜ。」と友は船頭の體を越して、岩と岩との逼る間を半町の向ふに見る。水はどうと鳴る。

「なるほど。」と舷から首を出した時、船ははや瀨の中に滑り込んだ。右側の二人は、すはと波を切る手を緩める。櫂は流れて舷に着く。舳に立つは、横たへたまゝである。

傾いて矢の如く下る船は、どゞどと刻み足に、船底に据ゑた腰に響く。と、もう走る瀨を抜けだして居た。

「あれだ。」と友が指す後を見ると、白い泡が一町ばかり逆落しに

保津川

嚙合つて、谷を洩れる微かな日影を、萬顆の珠とわれがちに奪ひあつてゐた。

船頭は至極冷淡である。松を抱く巖の、落ちんとして落ちざるを、苦にせぬやうに、櫂を動かし來り棹を操り去る。瀨は樣々に廻る。廻る毎に新な山が當面に躍り出す。石山・松山・雜木山と數ふる遑を、行客に許さざる疾き流は、船を驅つて又奔湍に落し込む。

大きな丸い岩がある。紫の裸身にうちつけて散る水沫を、春寒く腰から浴びて、綠崩るゝ眞中に

舟こそ來れと待つ。舟は矢も楯も物かは、一途にこの大岩を目懸けて突きかゝる。

「當るぜ。」と友が腰をうかした時、紫の大岩は早くも船頭の黑い頭を壓して突立つた。船頭は、「うん。」と舳に氣合を入れた。舟は碎ける程の勢に波を呑み、岩の太腹に潛り込む。横たへた竿は取直されて、肩より高く兩の手が揚ると共に舟はぐうと廻つた。「この獸め。」と突き離す竿の先から、岩の裾を尺も餘さず斜に滑つて舟は向ふへ落ち出した。

急灘を落ち盡すと、向ふから空舟が上つて來る。船頭は、竿も使はねば、櫂は無論のことである。肩から斜に細引繩を長々と、谷間づたひに力の限り牽いて來る。水行く外に尺寸の餘地だに見出し難い岸邊を、石に飛び岩に這うて、穿く草鞋のめり込むまで腰を前に折る。うんと蹈んばる金剛力に岩は自然と磨りへつて、引懸



大悲閣
嵐山にある。

けて行く足の裏をやす〳〵と受ける段々もある。長い竹をこゝかしこと岩の上に渡したのは、牽綱をわが勢に逆らはぬ程に疾く滑らす爲の策といふ。

「少しは穩かになつたね。」と友は左右の岩に眼を放つ。蹈む角も見えぬ切立つた山の遙かの上に鉈の音が丁々とする。黑い人の影が空高く動く。

「その鼻を廻ると嵐山どす。」と長い棹を、舷のうちへ挿込んだ船頭がいふ。鳴る櫂に送られて深い淵をすべり出すと、左右の岩が自ら開いて舟は大悲閣の下に着いた。（漱石全集）

保津川の岸に沿ふなる女松山幹紫にしのゝめするも

與謝野晶子

幸田露伴
名は成行、慶應三年生、文學博士、小說家。

# 五　風の音

幸田露伴

禽の聲は朗かなるがうちにやはらかみありて好く、蟲の音は清きがほかに寂しみありて面白し。其の他絲竹の音は言ふに及ばず、男女唱歌の聲に至るまで、皆とり〴〵に美しくも、めでたくも耳に響けど、それ等はいづれもおのがじし唯ひと節あるのみ、風の音の或は壯に、或は幽に、或は冴え、或は咽びて、あらゆる趣を兼ね具ふるに及ばず。

まづ新玉の年の首の初風の、其の姿は日の旗影に見えながら、其の聲は門の松が枝にも無く、たゞひそかに注連繩・輪飾を囁かせたる、有るか無きかの音なれど、おもひなしにやいと嬉しく聞ゆ。

芽出しの柳輕う動きて、櫻の蕾ふつ〳〵と膨らむ頃、暖き風のやや強く吹くことあり。浪速に貝寄せの風と云ふもこれなるべく、



吾妻には春三番の嵐といふ稱ある、その一番にも當るべきにや。草木多くはなほ葉を出さざるときなれば、風たゞ蓬々として大空をわたるのみながら、萬物既に春の優しさに潤ひて、石も烟を生ぜんとする折の、岩ふき尖る冬とはおのづから違ひて、暴きが中にも何と無く溫かみありて、虻・蜂もこれより羽搏てよ、蛙・田螺もこれより唱へよと、天つ神などの進軍の歌の聲揚げたまふを、遙かにとほき雲の彼方に聞くが如き心地す。

花に醉ひたりし昨日の夢の、今日簾外の青山に覺めて、白磁の小盌に心靜けく新茶を品する午過ぎの閑かに、庭前の若葉の梢吹きしをる風の音の、獵々颯々として勇ましきを聞きたる、胸すきて潔し。天は暖め、地は養ひて、氣は加はり、物は長ずる頃とて、枝は靭くして折れず、葉は水をふくみて柔かなれば、打聞には正しく木の聲ながら、よく味はへば水の聲ありて、或は淙々として響き、或は澎々

として鳴る。夏の嵐の耳に快く、心に涼しき、一はまさに此れが爲なるべし。朝露濕る幽徑のいさゝむら竹に嵐渡りて、さや〳〵と鳴りたる、特に清らにゆかし。竹は布袋竹・四方竹など、風の音好し。眞竹・孟宗竹・大明竹は眼にのみ好し。

風樹

秋風の音は、人もいひ古したれど、疎林に星の夜を騷ぎ、荒野に薄墨の夕を吹く、いづれかあはれに悲しからざらむ。長谿霧霽れて、崖這へる葛のざわざわと鳴る初秋、高天雲飛んで、黃蘆蕭蕭と、萬莖力究まつて水にをれ偃さんとする晩秋、皆人の心を動かし思を惹くに足る。

功遂げ氣藏まりて、宇宙凝寂たる冬の日の風こそは凄じけれ。



或夜雪を伴なつて、さら〳〵と紙窓に音づれたる、或日寒威の烈しきに乘じて、屋角に叫び徹したる、それ等誠に物淋しかれど、椋欅などの高き梢の、槁葉拂ひ盡して、體瘦せ膚枯びたるに、三更の風の緊しく當りたる、特に寢覺の魂魄をおのゝかしむ。葉落ちて後は、樹木衞營の氣沈み降りて、根に還るものなれば、纖きも太きも、枝々の水は乏しくなりて、堅さ自ら加はり、撓み心も極めて少くなるまゝ、疾風これに當るも、鐵骨太虛に傲り、鋼爪空ざまに張りて、更に屈すること無く、千年の闇に立てる怪しき魑魅の鋭き聲音して何をか歌ふを聞くが如く、樹木の聲の中に金石の聲あるをおぼゆ。おもしろきはなほこれに限らず、それ〳〵味ある四季の風よ、鳥の聲も物かは、蟲の音も物かは。

（洗心錄）

# 六　晩春の別離

島崎藤村

島崎藤村
名は春樹、長野縣の人、明治五年生、詩人、小說家。

時は暮れ行く春よりぞ
また短きはなかるらん。
恨は友のわかれより
さらに長きはなかるらん。

君を送りて花近き
高樓までも來て見れば、
みどりにまよふ鶯は
霞空しく鳴きかへり、
しろき光は佐保姫の
春の車を照らすかな。

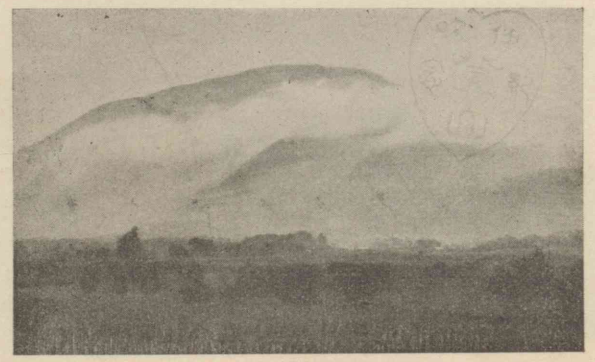
琵琶湖



法皇
白河法皇。

これより君は行く雲と
ともに都を立ちいでて、
おもへば琵琶の湖の
岸の光にまよふとき、
ひがし膽吹の山高く、
西には比叡比良の峰、
日は行きかよふ山々の
ふかきながめを伏仰ぎ、
いかにすぐれし想をか、
沈める波に湛ふらん。

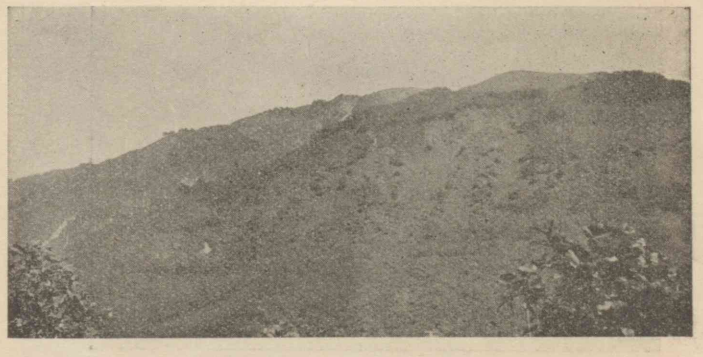
ながれはむなし、法皇の*



伊吹山

夢はるかなる賀茂の水、
水にうつろふ山城の
みやびの都ゆく春の
かすめる姿見つくして、
畿内にせまる伊賀、伊勢の
鈴鹿の山の波とほく
海に落つるを望む時、
いかによろづの恨をば、
空行く鷲に窮むらん。

春さり行かば、青丹よし
奈良の都に尋ね入り、
としつき君がこひしたふ
ふの



比叡山



御堂のうちに遊ぶ時、
ふるき藝術の花の香の
伽藍の壁にのこりなば、
いかに韻を身にしめて、
深き思にしづむらん。

さては秋津の島が根の
南のつばさ紀の國を
めぐりて進む黒潮の、
鳴門に落ちて行く處、
あまぎは遠く白き日の
光をもらす雲裂けて、
目にはるかなる遠海の

比良山

波のをどるを望む時、
いかに胸打つ音たかく、
君が血汐のさわぐらん。

または名に負ふ歌枕、
波に千とせの色映る
明石の浦の朝ぼらけ、
松よろづよの音にひゞく
舞子の濱のゆふまぐれ、
もしそれ海の雲落ちて、
淡路の島の影くらく、
さ霧のうちに鳴きかよふ
千鳥の聲を聞く時は、

奈　良



いかに浦邊にさすらひて、
遠き昔をしのぶらん。

げに君がため山々は
雲を停めん、浦々は
磯にながるゝ白波を
あげんとすらん。よしさらば、
旅路遙かに野邊行けば
野邊のひめごと、森行かば
森のひめごと探りもて、
高きに登り、あめつちの
もなかに遊び、大川の
ながれをきはめ、山々の

明　石

神をもよばひ、谷々の
鬼をもおこし、歌人の
魂をも遠く返しつゝ、
清しき聲をうち揚げて、
朽ちせぬ琴をかきならせ。

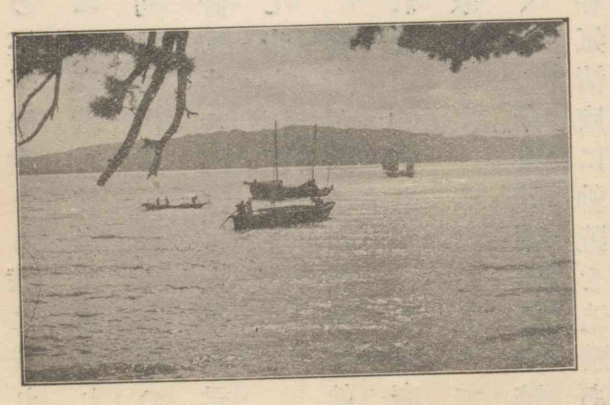
さらば名殘は盡きずとも、
たもとをわかつゆふま暮、
見よ影ふかき欄干に、
けむりをふくむ藤の花。
北行く雁はおほ空の
霞に沈み鳴きかへり、
彩なす雲も愁へつゝ、

舞子



君を送るに似たりけり。
あゝ、いつか又相逢うて
もとの契をあたゝめん。
梅も櫻も散りはてて
すでに柳は深みどり、
人はあかねど、行く春を
いつまでこゝに留むべき。
われに惜しむな家苞の
一枝の筆の花の色香を。

（藤村詩集）



淡路島

藤岡作太郎
石川縣の人、明治四十三年歿、文學博士、國文學者。

本誓寺
東京市深川區仲大工町にある、淨土宗、京都知恩院の末寺。

菊池容齋
歷史畫家、明治十一年歿。

平出君
平田鐵次郎、名古屋の人、明治四十四年歿、國文學者。

今上陛下
明治天皇。

# 七　愛兒の記念

藤岡作太郎

早くも三四年を過ぎぬ。深川の本誓寺に詣でて、五百羅漢の畫幅を見たる事ありき。菊池容齋の經營慘澹たる筆に成れる大作にて、春秋の彼岸にはこれを懸け列ねて供養し、普く有緣の參拜を許す由なれば、友人平出君を誘ひて歩を運びしなり。

菊池容齋

容齋が揮毫の因緣に就ては、哀れなる物語あり。今日廣く世に行はるゝ前賢故實は、この歷史畫家が畢生の心血を絞りて成し、以て風教を補はんとしたるもの、辱くも今上陛下が「日本畫士」の號を賜ひしもこれが爲なるべく、又和氣清麿に神號を追贈あらせら



福田行誠
淨土宗の高僧、東京芝增上寺に住し、後深川本誓寺に隱居し、後また推されて知恩院門主となつた、明治二十一年寂。

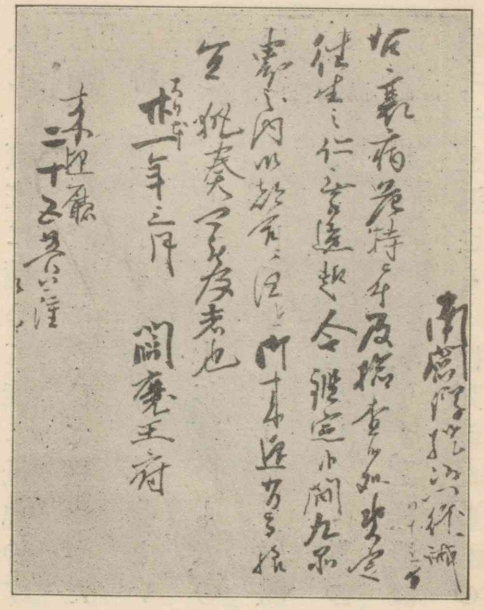
れしも、或はこの書がその動機となりしなるべしとも傳ふ。されど、初はこの十年苦心の作も發行する書肆なく、上梓する資財なく、久しく筐底に籠めて、徒に紙魚のすみかとなるを待つばかりなりしかば、福田行誠に向ひて堪へがたき遺憾の情を漏らしたりき。

時に、江戸牛込に加藤金兵衛といふ商人ありき。手の中の珠とかしづきし一人の女、年頃にもなりしかば、或方に嫁入らせしに、幾ほどもなくして身まかりぬ。「婚禮のをり持參せる衣服・調度、今はこなたに置きても詮なし、たゞ歎の種ぞ。」とて、婿の方より里方に返す。里方には受取らず「一旦遣はしし女の道具は、卽ちそなたの物、それを返さるゝは死したるものを離緣するやうにて、草葉の蔭にもいかばかり悲しからん。これはそなたへ。」「いや、こなたへ。」と押問答の果、金兵衛は腕拱きて、「さらば吾に思案あり。今深川におはする行誠上人は淨土宗の大德、古今の名僧と聞くに、この聖に

南閻浮提沙門
行誠　八十三歳
右衰病危特ニ付及
檢査候處決定往生
之仁無相違趣令鑑
定候間九品界之内
御都合ニ任セ御來
迎有之樣宜執奏可
被及者也
大日本
廿一年三月　閻魔王府
來迎臨
二十五菩薩
御中

託しまゐらせなば、衆生濟度の便ともしたまひて、なき女が往生の緣ともなりぬべし。」といふに、乃ち相談は決し、かの調度を賣代となし、なほ首尾をあはせて一千兩の金を行誠に捧ぐ。

さてこそ行誠は容齋を招きて、「喜ばれよ、御身の志は成りぬ。印刷の料は調へ得たり。」とあるに、容齋は涙ぐむまで嬉しく有りがたく、脫稿ののち凡そ二十年にして、ここに前賢故實の出版に取りかゝりしなりけれ。「年來の宿望は今しも遂げたるに、いかにしてこの大恩に報ゆべき。」とたづぬるに、行誠は「善いかな。さらば五百應眞の圖を畫きて供養し



稿田
行誠
筆



たまはば、亡者の爲施主の爲、いかばかりなる功德ならん。御身の滿足より、延いては世間の滿足も、ひとへに世を早うせし少女の爲、それを悲しむ父母のためなるを。」と示す。「それこそ吾にふさはしき業なれ。いかで加藤氏の名を萬世に朽ちせぬばかりに。」と、沐浴齋戒して書きあげたるが、この本誓寺の什物なりとかや。

吾等が參詣せし折もくさ〴〵の供物の捧げたるが中に、小兒の玩具の珍しく面白きを取集めたるがあり。これも近頃愛兒を失ひし人の、その遺物をこゝに納めしなりとのことなりしが、一わたりあはれと見たるばかりにて、さしも心にも留まらず、畫幅の由緒も一わたり聞きたるまでにて、容齋の筆法はとあり、思想はかゝりなど思ふまゝの事を言ひ散らして、さて過ぎにき。今思へば淺はかなりし事かな。昨日は人の身の上、今日は我が身など、古めかしき言草ながら、今こそひし〳〵と心の底に染みぬれ。吾も一昨年

の夏長女を失ひぬ。長女の名は光、時に七歳、笑ひさゞめき戯れしものの、はかなき病に忽然とこの世を去るべしとは誰か思はん。

わが身は既に四十に近し、この後爲すべき事の奥も測り知られたり。唯わが子のみぞわが誇、わが望なりしを、一朝にして死の手に奪ひ去らるゝこと、あらばあらるゝことか、かくても過さば過さるゝことか。或時はありのすさびに過してし、なくてぞまことの哀れさは知りぬる。よくもあしくも咲き出でたる花の、手折らるるはさてありぬべし。固き蕾の人の目にとまるともなくて、不意の嵐にもぎ取られし恨はいかばかりぞや。年たけて少しにても世にあるかひの務をなしたらば知らず、やう〳〵物のあやめも覺ゆる程に、早くももとの闇路に歸りなば、かゝるもののありしと知るは家の内の人ばかり。世にも知られで空しく來り、また往く、いかに悲しきことぞ。愚かなる親はせめても亡き兒の、わが心に、又

或ときは ある時はありのすさびにかくかりき、なくてぞ人はこひしかりける。



人の心に忘れずば、それをしもなほ生きたりと喜ばん。固よりわが家のものの生涯忘るべき筈もなし。唯忘れじとにはあらず、幼き罪なき兒はさま〴〵の教訓を、その親、その祖母に遺したり。もし吾等の將來に得る所あらば、そは即ちわが兒の賜ともちいつきてん。さりとても現なの心や。過ぎ去りし面影と、殘しゆきしこの教とを身にしめて、いまだ足らず。願はくは忘れんとするわが友の一人にても、我が兒を思ひ出でんことを。知らで止みなん世の人の一人にても、かゝるものもありしよと愍まんことを。これのみぞなき後の我が望なりける。

豐太閤が朝鮮征伐を思ひ立ちしは、老いての後やう〳〵儲けたりしみ*どり兒に死なれて、鬱悶やる方なく、いかにしてか其の悲しみを忘れんとてなりと傳ふる事のあるを、歴史家は「そは英雄の心事を解せず、着々として歩を進めたる經營に心づかざる僻事なり。」

みどり兒 鶴松。

愛妃　弘徽殿の女御氏子。

といはん。されど、凡人にせよ、英雄にせよ、人の情は同じきものを、當時の秀吉が胸のうちを思ひやりては、是非は知らず、傳ふる事のまた所以ありと思はざるを得ず。華山天皇は愛妃を先だてし御悲しみに堪へ給はざりしその機に乘じて、藤原道兼がそゝのかしまゐらせしかば、則ち宮中を遁れ出でて出家せさせ給ひき。後にぞ道兼が欺けるなりと知りて悔しく思召しけると、古史には記したるが、果して法皇は悔み給ひけんや。かれ佞臣が欺けるなりとは知りつゝも、それも得菩提の善知識、亡き人の爲にはよくこそ朕を誘ひけれと、逃げ去る道兼を見送りて、滿足して御髮は下し給ひけんかし。おほけなき例を引き奉るにはあらねど、わが身に思ひしむにつけて、更めて昔の跡を顧みるなり。健かなる者は日々の務に勵みて其の悲しみを忘るべし。悟ある者はせん方なき世の習と、術無き思に沈まざるべし。あはれ身も心も弱き者の奮ひ立



白鹿の城　出雲國八東郡、一に白髮とも書く。尼子晴久の妹婿松田左近將監據守したところ。

ちて働き疲るゝ事もせず、さりとて一筋に思ひ締むることもならず、つく〴〵と日毎に同じ歎を繰返すかな。

永祿四年、毛利元就の嫡子大膳大夫隆元頓死す。家臣等、父母の愁傷いかばかり甚だしかるべきと、心配一方ならざりしに、案の外、元就は悲痛の色なく、其の子吉川元春・小早川隆景及び家臣等を呼びて、「隆元の死亡は偏に尼子滅亡の基なり。わが子の弔合戰と思ひて、皆々心を一つにして向はば、强敵もいかでか挫かざるべき。勝利は掌の中なり。隆元のためぞ、位牌の見てあるぞ」と勢こんで言ひしかば、上下愁眉を開いて勇み立つ。「之をしほに進めや」とて、元就自ら三軍を率ゐて、やがて白鹿の城を拔きたりといふ。論ずる者はいふまでも無く、これ兵氣の沮喪するを憂へて人心を鼓舞せしなりといふめれど、それのみにては物足らず、夭折せし愛子を悼みて、「一勝一功も其の手に成りしと知らせばや。」との親心

一人足らず都へと思ふものかなしきは、かへらぬ人のあればなりけり。（土佐日記）

ならじやは。勇ましき世の事は思ひもよらず、吾にははかなき筆あるのみ。南海の任に下りし時伴なひし人の、歸り上る時は一人足らずと歎きて書きし、貫之朝臣の日記に思ひ比べんには、似も似ぬすさびながら、千年の前後に通ひめぐる人の心ばかりは同じかりけり。されど我が日記は、同じ事を繰返し〳〵て、人に示すほどのものならず。何をがな世に公にして、愛兒の記念とせんと思ひなりぬるも、筆執ることさへ懶くて、はか〴〵しくも心を定めず。

かくて思ひ立ちぬるより三とせを閲して、やう〳〵に稿を了へたるが、この文學史なり。誇らはしく世に示さんこと、江湖に對して、また亡兒に對して、恥づかしくは思へど、今はたすべなし。同じ心にあはれと見る人あらば、わが望は足りなん。（國文學史講話）



大槻文彦　仙臺の人、昭和三年歿、文學博士、文學者、語學者。

今年　明治二十四年。

## 八　ことばのうみのおくがき

大槻文彦

先人、嘗て、文彦らに、王父が誡語なりとて語られけるは、「およそ、事業は、みだりに興す事あるべからず。思ひさだめて興すことあらば、遂げずばやまじ、の精神なかるべからず。」と語られぬ。おのれ、不肖にはあれど、平生この誡語を服膺す。本書、明治八年起稿して*より、今年にいたりて、はじめて刊行の業を終へぬ。思へば十七年の星霜なり。こゝに過去經歷の跡どもを、おほかたに書いつけて、後のおもひでにせむとす。見む人、そのくだ〳〵しきを笑ひたまふな。

遭厄の中に、もとも堪へがたく、又成功の期に近づきて、大いにこの業をさまたげつるは、おのれが妻と子との失せつることなりけ

り。爰には不用にもあり、くだ〳〵しうもあれど、おのれの身にとりては、この書の刊行中の災厄とて、もとも後の思ひ出とならむことなるべければ、人の見る目にも恥ぢず記しつけおかむとす。

大槻文彦

去々年十一月に生まれたるおのが次女の「ゑみ」といへる、生まれてよりいとすこやかなりしが、去年十月のはつかばかりより、感冒して、後に結核性腦膜炎とはなれり。醫高松氏が病院に、妻、小婢と共に托せしに、病性よからずして心をなやましぬ。

朝夕に行きては、いたはしき顏をまもり、歸りては筆を執れども、心も心ならず。十一月十六日の、まだ宵の間に、まさに原稿の「ゆ」の部を訂正して、箏のおし手の「ゆしあんずるに」「ゆのねふかうすまし



たり」などいふ條を推敲せるをりに、小婢、病院よりはせかへりきて、家に入りて、物をもいはずそのまゝ打伏し聲立てて泣く。病の危篤なるを告ぐるなり。筆をなげうち、蹶起してはしりゆけば、煩悶しつつやがて事切れぬ。

泣く〳〵屍を抱きて家にかへり、床に安して、さて、しめやかに靑き燈の下に、つとめてふたたび机に就けば、稿本は開きて故の如し。見れば源氏の物語、若菜の卷、「さりとも琴ばかりは彈き取り給ひつらむ、云々、晝はいと人しげく、なほ、ひとたびもゆしあんずるいとまも、心あわたゞしければ、夜々なむしづかに、云々。」「ゆ」は「搖ること」なり、「あんずる」は「按ずる」にて、「左手にて絃を搖り押す」なり。又、紅葉の賀の卷、「箏のことは、云々、いとうつくしうひき給ふ。ちひさき御程に、さしやりてゆし給ふ御手つき、いとうつくしければ。」おのれが思ひなしにや、讀むにえたへで机おしやりぬ。

紀氏の書

紀貫之の土佐日記。

この夜一夜、おのれが胸は、ゆしあんぜられて夢を結ばず。「死にし子、顔よかりき。」「をんな子のためには、親、をさなくなりぬべし。」など紀氏の書きのこされたりつるを、さみし思へることもありしが、今は、わが身の上なり、宜なり、など思ひなりぬ。この小兒の病に心を痛めつるにや、打ちつゞきて、家のうちに、母にておはする人をはじめとして、病に臥すもの、五人におよびぬ。妻なる「いよ」なげきのなかにも、ひとりかひ〴〵しく人々の看病してありしが、遂にこの月のすゑつかたより病に臥しぬ。

初は、何の病ともみとめかねたるに、數日の後、膓窒扶斯なりとの診斷をきゝて、おどろきて、本郷なる大學病院に移して、また、晝に夜にゆきかよひて病をみ、病のひまをうかゞひては歸りて校訂の業に就けども、心はこゝにあらず。洋醫ベルツ氏も心をつくされけれど、遂に十二月二十一日に三十歳にてはかなくなりぬ。



いかなる故にてか、かゝる病にはかゝりつらむ。年頃善く母に事へ、我に事へ、この頃の我が辛勤を察して、よそながら、いたく心をいため、はた、家政の苦慮を我におよぼすまじと、ひとり思をなやましてまかなひつゝありける狀なりしに、子のなげきをさへ添へつれば、それら、やう〴〵身の衰弱のたねとはなりつらむ。さては子の失せつるも、衰弱せる母の乳にやもとゐしつらむ。「あゝ、今の苦境も後にいつか笑ひつゝ語らはむ。」などかたらひたりしに、今はそのかひなし。

半生にして伉儷を喪ひ、重なるなげきに、この前後數日は、筆執る力も出でず。強ひて稿本に向へば、あなにく、「ろ」の部「ろめい」（露命）なといふ語に出であふぞ袖の露なる。

そも、かゝるめゝしくをぢなき心を、ことゞ〴〵しう書いつけおかむは、人わらはれなるわざにて、はぢがましきかぎりなれど、この頃

の筆硯の苦、人情の苦に窮措大が嚢中の苦さへ、湊合しつることなれば、後にこの書を見むごとに、おのれひとりが思ひやりにせむとてなり。讀まむ人はあはれとも見ゆるし給へや。

（續古今集序）

花は木毎に咲きて遂に心の山を飾り、露は草の葉より積りて言葉の海となる。

しきしまや大和言葉の海にして拾ひし玉は磨かれにけり。

（後京極）



和辻哲郎
兵庫縣の人、明治二十二年生、文學者、京都帝國大學助教授。

淨瑠璃寺
京都府相樂郡當尾村大字門前にある。眞言宗。

## 九　淨瑠璃寺への道

和辻哲郎

今日は淨瑠璃寺へ行つた。晝過ぎに歸れるつもりで、晝飯の用意を云ひつけて出掛けたのが、案外に手間取つて、また案外に面白かつた。

奈良の北の郊外はすぐ山城の國になる。それは名義だけの區別ではなく、實際に大和とは氣分が違つてゐるやうに思はれた。奈良坂を越えるともう光景が一變する。道は小山の中腹を通るのだが、その山が薄赤い砂の極めて痩せた感を持つたもので、幹の色の美しいひよろ〳〵した赤松の他には殆ど、木らしいものはない。それも道より下の麓の方に所々群がつてゐるきりで、あとは三尺に足りない雜木や小松が、山の肌を覆ひ切れない程度で、所斑に山にしがみついてゐるのだ。さうしてその斑の間には一面に

つゝじの花が咲き亂れてゐる。この景色は三笠山やその南の大和の山々には見られない。併しその乾いた、砂山めいた禿山の氣分は僕には親しいものだつた。かういふ所では子供でも峰傳ひに自由に遊びまはれる。丁度今頃は柏餅に使ふ柏の若葉を集めて歩く時分だ。つゝじの桃色や薄紫も賑やかなお祭らしい心持を子供の心に浮き立たせる。谷川へ下りて水いたづらをしてももう寒くない。じい〳〵蟬の聲が何となき心細さを誘ふまで、子供達は山に融け入つたやうになつて遊ぶ。それは二十年前の僕の樂しみだつた。僕は故郷に歸つたやうな心持で、飽かずに俥の上からこの景色を眺めてゐた。

道はまだ大變だつた。山を出て里へ出たり、それらしいと思ふ山をいつか通り過ぎてまた山の間にはいつたり、やがてまた舊家らしい家のある綺麗な村へ出たり、而も雨あがりの道のひどいで



こぼこで、俥に乘つてゐるのも閉口だつた。畑と山との美しい色の取合せを俥の上で賞めてゐた僕たちも、とう〳〵我慢しきれなくなつて、皆その狹い田舍道に下り立つた。

寺の麓の村まで來ると、小石のごろ〳〵した危かしい急な坂を歩かねばならなかつた。が、その急な坂は割に短くてすぐ峰傳ひの坦々たる道へ出た。それで安心して歩いてゐると、又この坦々たる道が中々盡きさうもなくなつた。赤松の矮林の間には相變らずつゝじが咲いてゐた。道傍に石地藏の並んだ所もあつた。大きい竹藪の間に人家の見える所へも來た。水の音が頻りに聞えていかにも幽邃な趣がある。あれこそ寺だらうと思つてゐると、それは水車屋だつた。山の下から眺めた時遙かに絶頂の近くに見えた家がどうもこれらしい。もうそんなに高く登つたのかと思ふ。やがてべら棒に大きな岩が道傍の崖からはみ出てゐる

所をだら〳〵と登つて行くと、急に前が開けて水田にもなるらしい麥畑のある平地へ出た。村がある。森がある。小山がある。こんな山の上にあるだらうとは豫期しない如何にも長閑な農村の光景だつた。淨瑠璃寺はこの村の一隅にこの村の寺らしく納まつてゐた。これも豫想外だつた。しかし何ともいへない平和ない〻心持だつた。

こんな風でもう奈良坂まで歸つてゐてい〻時刻に、やつと淨瑠璃寺へ着いたのだつた。

さてこの山村の麥畑の間に立つて、寺の小さい門や、白い壁や、その上からのぞいてゐる松の木などの野趣に充ちた風情は、それを前にも見たといふ氣がしてならなかつた。門をはいつて最初に目についたのは、本堂と塔との間にある寂しい池の水の色と葦の若芽の色とであつたが、その奇妙に澄んだ濃い冷たい色の調子も

淨瑠璃寺

初めてだといふ氣がしなかつた。背後に山を負うて如何にもしつくりとこの庭にはまつてゐる優美な形の本堂さへも、また庭の隅の小高い所に朽ちかゝつたやうな色をして立つてゐる小さい三重の塔さへも僕には初めてではなかつた。そんな馬鹿な事がある筈はない。併し堂の前の白い砂の上を歩きながら、僕はこの漠然たる心持から脫することが出來なかつた。もし前世の記憶といふものが、いや今はさういふ問題には觸れまい。唯かういふ事を考へてほしい。淺い山であるが、兎に角山の上に下界と切離されたやうになつて一つの長閑な村がある。

そこに自然としつくり調和した優しい小さな塔とお堂とがある。心を潤すやうな透つた可愛らしさが凡ての物の上に一面に漂つてゐる。それは現代人の心には餘りに淡きに過ぎ、平凡に過ぎる光景だが、而も我々の心が和ぎと休息とを求めてゐる時には、秘めやかな魅力を以て我々の心の底の或者を動かすのだ。桃源の夢想、それが淨土の幻想と結付いてその山上の地を擇ばせ、この池のほとりのお堂を建てさせたのかも知れないと思はれるが、それを我々と全然緣の古い昔の逸民の空想として、一顧の價値だも認めてゐなかつた我々が眞實はなほその夢想に共鳴する或者を持つてゐる。それは僕には驚きだつた。さうしてその心持を省みて檢した時に、僕は嘗て自分が桃源に住んでゐたのだといふことを發見した。即ち僕は嘗て子供であつた。それはほんの心の隅の出來事だ。僕はそれを心の全面に擴げなくてはならないとも思



はない。唯日頃氣附かないことを今日の旅で氣附いたのだが、僕にはそれが面白いのだ。

こんな心持になつてゐたもので、本堂の中に横に一列に並んでゐた九體の佛には充分注意が集まらなかつた。Z君に云はれて横に長い須彌壇の前の金具を成程面白いと思つた。佛前に一々置いてある手燭のやうな恰好の木塊に畫かれた畫も面白かつた。色の白い地藏樣もいゝ作だと思つた。併し何よりも周圍と調和した堂の外觀が僕には好かつた。開いた扉の間から金色の佛の見えるのもよかつた。あの優しい新綠の内に大きい九體の佛があるといふ印象は藤原末期の幻想に似つかはしい。

もう餘程晝も過ぎてゐたので、庫裏にゐた妻君の好意で僕たちは缺茶碗に色の黑い飯を盛つた晝飯を食つた。それが今日の旅にはふさはしかつた。

（古寺巡禮）

相馬御風
名は昌治、新潟縣の人、明治十六年生、早稲田出身の文學者。

# 一〇 表現について

相馬御風

自己を表現することは、恰もラツキヨの皮を一枚々々むいて行くやうなものである。卽ち私達は表現することによつて一枚一枚自己の心の皮をむきながら歩一歩と自己の核心に近づいてゆくのである。――こんなことを嘗て何かの本で讀んだことがある。

それまで私は自己を表現するといふことを、常に眞の自己の核心を現すことだと思つてゐた。しかも、いくらつとめても〳〵常に眞の自己の現せない惱を常に感じてゐた。併しそれを讀むに及んで、「成程さうであつた！」と始めて一つの大きな安心を得たのであつた。

まつたく私にとりては、表現は一枚々々自己の殼を脫ぐことであつたのだ。自分ではどうかして本當の自己を現したい〳〵と焦つてゐるが、實はそれは本當の自己を現すことではなくて、むしろ一重々々殼を脫ぎつゝ一歩々々本當の自己の核心へと探り入つて行くことであつたのだ。

他の人々にとりてどうであつても、私一個にとりては、今日でもその考は生きて行く上の一つの力となつてゐる。生きて行くことそのことが、私にとりては表現である。そして、それは一重々々殼を脫いでゆくことである。過去より現在へと生きつゝある私の姿、それは表現であると同時に、脫ぎ捨てた自己の殼である。隨つて本當の自己は自己の核心は最後まで殘るのである。そしてそれが最後に至つて大自然の前にと投げ出されるのである。

私は今、自分の生活をそんな風に考へてゐる。それは間違つた考だといふ人があるかも知れない。しかし私にはさうとしか考

へとれない。又さう考へることによつてのみ私は安んじて生を持續してゆくことが出來てゐる。

□

私は求める。常に何ものかを求めずにゐられない。しかし、本當に私の求めてゐる最後のものは、表現することによつてのみ、即ち生きることによつてのみ、近づくことが出來るのだ。――さうも私は考へてゐる。求める故に私は生きる。生きることによつて私は一重々々殼を脱ぐ。一重々々殼を脱ぐことによつて私は求める最後のものへと近づいてゆく。しかし、その最後のものはつひに私には攫めないであらう。攫めない代りに私はそのものになり切るであらう。そして大自然の前に投げ出されるであらう。

□



赤裸々な自己――誰が眞にそれを表現し得たであらうか。よし自ら成り得たと思つたにしても、又よし自ら表現し得たと思つたにしても、決してそれはさうではなかつたであらう。人は生涯たゞ殼を脱ぐことが出來るだけである。眞に赤裸な自己は最後まで殘るのではあるまいか。

裏をみせ表を見せてちるもみぢ

良寛が觀た最後の自己の姿はそれであつた。それは大自然の前に投げ出された一枚の木の葉に異ならなかつた。

無限にして、悠久なる自然の前に立つた孤獨な自己の姿こそ、最初にして最後なる自己の姿である。それは生まれた時の自己の姿であり、死ぬ時の自己の姿である。私達は一生はその最後の自己へと一重々々殼を脱ぎつゝ近づいてゆく表現の歩みである。

□

過去の自己の生活に、卽ち脱ぎ捨てて來た自己の殼に、誰が全き自己の姿を見得るものがあらう。むしろそれへの執着によつて、私達はいかに未來への生の求めを備へつけられてゐることであらう。

私達の求めは絶えず新なる表現でなければならぬ。絶えず殼を脱ぐことの惱でなければならぬ。そして眞に求むるところのものは最後まで殘るであらう。

□

私達の生涯には實にさま〴〵な瞬間がある。而も如何なる瞬間の自己が眞の自己であるかは私達にはわからない。わかつたつもりでゐてもわからない。あらゆる瞬間に於ける自己、あらゆる相に於ける自己が、いづれも本當の自己だとも云へる。又あらゆる瞬間に於ける自己、あらゆる相に於ける自己が、いづれも自己



でないとも云へる。それはどちらでもよい。たゞ私達があらゆる瞬間に於て自己を表現しようと求めてゐることだけは、自分達にもわかる。而もかくしつゝ常にその求めの充たされざる惱が私達の胸に殘る。そのことも何人と雖も否定し得ないことであらう。

しかし、そこにこそ、眞の自己への絶えざる求めがあり、絶えず新な表現があり得るのである。

（靜と動との間）

相馬御風

夕やみのほのけき庭に咲き出でてかすかにゆるゝ
月見草の花
たのしみはたま〴〵人と話すうちにおなじなやみ
にふれ合へる時

近松半二
大阪の淨瑠璃作家、天明三年歿。

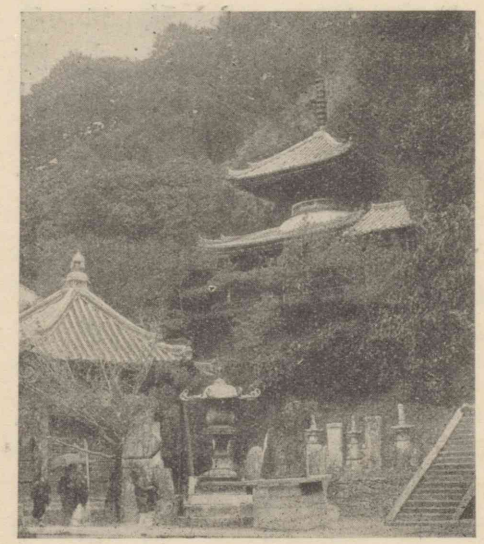
那智
紀伊國牟婁郡那智權現、西國第一番の札所。

きみゐ寺
紀伊國海草郡紀三井寺村金剛寶寺。西國第二番の札所。

# 一一 巡禮唄

近松半二

「普陀落や岸打つ浪は三熊野の那智のお山にひゞく瀧つ瀨。」年はやう〳〵とほ〳〵の、道をかけたる笈摺に、「同行二人。」と記せしは、一人は大悲のかげ頼む、「故郷をはる〳〵こゝにきみゐ寺、花の都も近くなるらん。」



紀三井寺

「巡禮に御報謝。」といふも優しき國訛。「てもしをらしい巡禮衆。どれ〳〵報謝進ぜう。」と、盆にしらげの志。「あいあい、有難うございます。」といふ物越から爪はづれ、可愛らしい娘の子。「定めて連衆は親御



達。國はいづく。」と尋ねられ、「あい、國は阿波の徳島でございます。」「うゝ、何ぢや、徳島。さつても、それはまあ懐かしい。わしが生まれも阿波の徳島。そして、父様母様と一緒に巡禮さんすのか。」「いえいえ、其の父様や母様に逢ひたさ故、それでわし一人西國するのでございます。」と聞いて、どうやら氣にかゝる。

お弓は尚も傍に寄り、「うゝ、父様や母様に逢ひたさに西國するとはどうした譯ぢや。それが聞きたい。まあ其の親達の名は何といふぞいの。」「あい、どうした譯ぢや知らぬが、三つの年に父様や母様はわしを祖母様に預けて、何處へやら往かしやんしたげな。それで、私は祖母様の世話になつて居たけれど、どうぞ父様や母様に逢ひたい、顔が見たい。それで、方々を尋ねて歩くのでございます。父様の名は阿波、十郎兵衛、母様はお弓と申します。」と聞いて恟り、お弓は取付き、「これ〳〵、あの、父様は十郎兵衛、母様はお弓、三つ

取らるゝ命　主君の重寶國次の刀の紛失したのがもとで。

の歳別れて、祖母様に育てられて居た。」とは疑もない吾が娘、と見れば見る程稚顔、見覺のある額の黒子。やれ吾が子か、懷かしやと云はんとせしが、いや待て、暫し。夫婦は今にも取らるゝ命、元より覺悟の身なれども、親子といはゞ、此の子にまでどんな憂き目がからうやら。それを思へば、なまなかに名乘だてして憂き目を見んより、名のらで此のまゝ返すのが、却て此の子のためならんと、心を靜め、よそ〳〵しく、「おゝそれはまあ〳〵、年はも行かぬに、遙々の處をよう尋ねに出さつしやつたのう。其の親達が聞いてなら、嘸嬉しうて〳〵、飛び立つやうにあらうが、まゝならぬが世の憂き節、身にも命にも代へて、かはいゝ子を振り棄て、國を立退く親御の心、よく〳〵の事であらう程に、むごい親と必ず〳〵恨まぬがよいぞや。」「いえ〳〵、勿體ない。何の恨みませう。恨むる事はないけれども、小さい時別れたれば、父様や母様の顔も覺えず、餘所の子供衆



が、母様に髪結うて貰うたり、夜は抱かれて寢やしやんすのを見ると、わしも母様があるなら、あの様に髪結うて貰はうものと羨ましうどざんす。どうぞ早う尋ねて逢ひたい。ひよつと逢はれまいかと思へばそれが悲しうどざんす。」と泣いじやくりするいぢらしさ。

母は心も消え入る思。「さても〳〵世の中に親となり子と生まるゝ程深い緣はなけれども、親が死んだり、子が先立つたり、思ふ樣にならぬが浮世。此方どれ程尋ねても顏も處も知らぬ親達。逢はれぬ時は詮ない事。もう尋ねずと國へ往んだがよいわいの。」「いえ〳〵、戀しい父様や母様。たとひいつまでかゝつてなと、尋ねうと思ふけれど、悲しい事は一人旅ぢやてゝ、何處の宿でも泊めてはくれず。野に寢たり、山に寢たり、人の軒の下に寢ては擲かれたり、こはい事や悲しい事。父様や母様と一緒に居たりや、こんな目

には逢ふまいものを。どこにどうして居やしやんすぞ。逢ひたい事ぢや。逢ひたい。」と、わつと泣き出す娘より、見る母親は堪りかね、「おゝ、道理ぢや、かはいや、いぢらしや。」と我を忘れて抱き付き、前後正體なげきしが、是程親を慕ふを、何と此の儘往なされう。いつそ打明け、名乗らうか。いやく、それでは、此の子も同じ罪。其の時の悲しさを思ひ廻せば、往なすが爲と、「おゝ段々の樣子を聞き、吾が身の樣に思はれて、悲しいとも情ないとも言ふに言はれぬ事ながら、とかく命が物種、まめでさへ居りや、また逢はれまいものでもない。これ、仕つけぬ旅に身を痛め、煩でも出りやわるい。何處を證據に尋ねうより、其の祖母樣の方へ往んで居るとの、追付け父樣や母樣が逢ひにいてぢや程に、惡い事は言はぬ、思ひ直して是からすぐに國へ往んで、隨分まめで、親達の尋ねて行かしやるのを待つて居るのがよいぞや。」と宥め賺せば、聽きわけて、「あいく、忝う



ございます。お前が其の樣に言うて、泣いて下さりますによつて、どうやら母樣の樣に思はれて、わしや此處が往にとむない。どんな事なと致しませう程に、まうしお家樣、お前のお側に、いつまでもわたしを置いて下さりませ。」「えゝ、悲しい事言出して、また泣かすのかいの。先にから、わしも子の樣に思うて、爰に置きたい、往なしとむないと、樣々思ひ廻せども、爰に置いてはどうも爲にならぬ事が有るによつて、それでつれなう往なすのぢや程に、聽分けて往んだがよいぞや。」といひつゝ、内へはり箱の底をさがして、豆板のまめなを悅ぶ餞別と、紙に包んで持つて出で、「これ、なんぼ一人旅でも、たんと錢さへやりや泊める。僅かなれども志、此の銀を路銀にして、早う國へ往にや。必ずくわづらうてばしたもんな。」と銀を渡せば押戻し、「嬉しうございんすれど、銀は小判といふ物をたんと持つて居ります。そんなりや、もう參じます。忝うございます。」と

泣く〳〵立つを引留め、「それはさうでも、此れは私が志。」と無理に持たして、塵打拂ひ、「これ、もう往にやるか。名殘が惜しい。別れとむない。これ、今一度顏を。」と引寄せて、見れば見る程胸迫り、離れがたなき憂き思。それと知らねど誠の血筋。名殘惜しげに振返り、「何處をどうして尋ねたら、父樣や母樣に逢はれることぞ。逢はしてたべ、南無大悲の觀音樣。「父母のめぐみも深き粉川寺、佛の誓たのもしきかな。」泣く〳〵別れ行く……。（傾城阿波の鳴門）

粉川寺 紀伊國那珂郡粉河村にある。天台宗、西國第三番の札所。

若し無量百千萬億の衆生有りて諸〻の苦惱を受けんに、是の觀世音菩薩を聞きて一心に稱名すれば、觀世音菩薩卽時に其の音聲を觀じて皆解脫を得しむ。（法華經普門品）



吉田絃二郎 名は源次郎、佐賀縣の人、明治十九年生、早稻田大學講師、文學者。

## 二二 鞭打つ者、鞭打たるゝ者

吉田絃二郎

鞭打たるゝ苦痛は、それが私たちの生活をより善く、より强いものとなさせる時、限りもなく貴い價値を持つてゐる。

愛によりて與へらるゝ鞭の苦痛に、限りもない價値が潛んでゐることは言ふまでもないことであるが、たとへ憎によりて與へられた鞭の苦痛と雖も、自分をより尊く、より善く、より强きものとなさしめるに價値ある場合が少くはない、憎が眞劍である限りは。

鞭打つといふことは、鞭打つ人の生活にとりてよりは、鞭打たる人の生活にとりて多くの意義を持つてゐる。私たちが最初から完全な人間でない限り、鞭打たるゝといふことは呪ふべきことではない。それは悲しい、苦しい事實には違ひないが。

鞭打たるゝ苦痛に誰が泣かないで居られよう。鞭の痛さを知

ればこそ、鞭打たるゝことが意義あるものとなつて來る。

鞭の痛さを何かにまぎらして、忘れようとするのは臆病である。どこまでも鞭の痛さを、痛さとして味ははなければならぬ。

強い人間となることは、鞭の痛さを避けようとする者には不可能である。どこまでも強くなれ、そしてどのやうな殘忍な鞭にもまともに向つて、鞭の苦痛を味ははなければならぬ。鞭は私たちをより善き人間とする。けれどもより強き人間でなければ、鞭に耐へることは出來ない。

私たちは與へられる鞭の苦痛を知ると同時に、尊いものであることを知つてゐる。けれども最後まで耐へ忍ぶには、往々にして餘りに弱い。弱きものはより惡しきものとなり、強き者はより善きものとなる。善惡には二元はない。鞭を忍ぶと忍ばないとの差のみである。



ツルゲーニェフ
ロシアの小說家。（一八一八—一八八三）

鞭打たるゝものにとりては、一つの輕い打擊もより重い打擊と思はれる。鞭打つ者にとりては、重き打擊も、餘りに輕きものと思はれるであらう。

鞭打つ打擊の餘りに重きを憂へる者は愛の人であり、鞭打たる打擊の餘りに輕きを感ずる者は、ほんたうに自分を觀ることの出來る敬虔な生活者である。

フェニーゲルツ

「俺は今日は何にも與へるものを持たない。」と言つて、乞丐の手を強く握つたツルゲーニェフの心は美しい。しかし、鞭打たるゝものよりも、より以上に深い悲しみと愛とをもつて、その友を鞭打つ者も尊い人格ではないか。

鞭打たれた痛さを忘れるものは愚人である。鞭打つことの辛

さを忘れるものは冷酷な人間である。

鞭打たれたものは終夜寢ることは出來ない。彼は轉々として床上に悶える。鞭打つたものも亦終夜寢てはならぬ。自分の與へた鞭が友の心を傷つたとするならば、鞭打つた彼は自分の心を傷るか、でなければ友の心を築き直してやらなければならぬ。鞭打つ者には當然それだけの義務がある。

鞭を持てる、多くの人々は言ふ。「自分は正しいことのために鞭打つた。」と。かくして彼は弱き不幸な惡人を鞭打つてやす〳〵と眠る。彼は繰返して言ふ。「正しきことのために鞭打つた。」と。そして彼は眠る。

彼等は誤つてゐる。鞭打たれたものの傷れた肉と傷れた心とは、「正しきことのために慰められはしない、癒されはしない。弱い人々にとりて「正しきこと」は何の力も慰めも持つてゐない。彼等



は愛に飢ゑてゐる。彼等は涙に渴してゐる。

鞭打たれたものの悲しみ以上に悲しみつゝ、夜もすがら悶えたことのある鞭打手でなければ、眞實の鞭打手ではない。

罪ある者を憎むものは眞實の說敎者となることは出來ぬ。罪ある者を愛し罪を悲しむもののみが鞭を使ふ權利を持つてゐる。

（生命の微光）

佐藤一齋

誘掖して之を導くは敎の常なり。警戒して之を喩すは敎の時なり。躬行して之を率ゆるは敎の本なり。言はずして之を化するは敎の神なり。抑へて之を揚げ、激して之を進むるは敎の權にして變なり。敎も亦術多し。

（言志後錄）

吉田兼好
左兵衛尉、後宇多天皇の北面の武士、後遁世、正平五年歿。

# 一三　徒然草　三篇

吉田兼好

つれ〴〵なるまゝに、日ぐらし硯にむかひて、心にうつり行くよしなし事を、そこはかとなく書きつくれば怪しうこそ物ぐるほしけれ。

兼好筆蹟

□あやしの竹の編戸の内より、いと若き男の、月影に色合さだかならねど、艶やかなる狩衣に濃き指貫、いと故づきたる樣にて、さやかなる童一人を具して、遙かなる田の中の細道を稲葉の露にそぼちつゝ行くほど、笛をえならず吹きすさびたる、あは

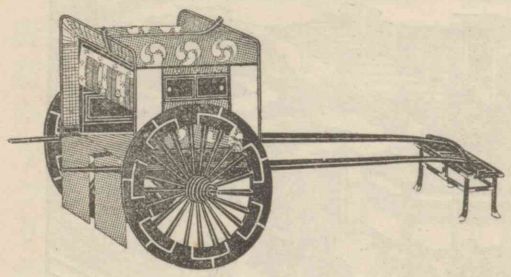
狩衣と指貫



れと聞き知るべき人もあらじと思ふに、行かん方知らまほしくて見送りつゝ行けば、笛を吹きやみて山の際に總門のある内に入りぬ。榻に立てたる車の見ゆるも、都よりは目止まる心地して、下人に問へば、「しか〴〵の宮の在します頃にて、御佛事など候ふにや。」と云ふ。

御堂の方に法師ども參りたり。夜寒の風に誘はれ來る空焚物の匂も身に染む心地す。寢殿より御堂の廊に通ふ女房の追風用意など、人目なき山里とも云はず心づかひしたり。

心の儘に繁れる秋の野らは置き餘る露にうづもれて、蟲の音かごとがましく遣水の音のどやかなり。都の空よりは雲の往來も早き心地して、月の晴れ曇ること定め難し。



榻に立てたる車

桃李云々
桃李不レ言春幾暮、煙霞無レ跡昔誰栖。（菅原文時）

京極殿
藤原道長の邸宅。

法成寺
藤原道長の建立。

御堂殿
御堂關白藤原道長。

法成寺の造營

□飛鳥川の淵瀬

飛鳥川の淵瀬常ならぬ世にしあれば、時うつり事さり、樂しび悲しびゆきかひて、花やかなりしあたりも、人すまぬ野らとなり、變らぬ住家は人あらたまりぬ。桃李物いはねば、誰と共に昔をかたらん。まして見ぬ古のやんごとなかりけん跡のみぞいとはかなき。京極殿、法成寺など見るこそ、志とゞまり、事變じにける樣はあはれなれ。御堂殿の作り磨かせ給ひて、庄園多く寄せられ、我が御族のみ、御門の御うしろみ、世のかためにて、行末までとおぼし



正和
花園天皇の年號。

行成
藤原行成、後一條天皇頃の人、三蹟の一人。

兼行
藤原兼行、後冷泉天皇の頃の人、書家。

物のあはれ云々
「春はたゞ花のひとへに咲くばかり、物のあはれは秋ぞまされる。」（拾遺集）

おきし時、いかならん世にも、かばかりあせ果てんとはおぼしてんや。大門、金堂など近くまでありしかど、正和のころ南門は燒けぬ。金堂はその後たふれ伏したるまゝにて、取りたつるわざもなし。無量壽院ばかりぞ、そのかたとて殘りたる。丈六の佛九體、いと尊く並びおはします。行成大納言の額、兼行が書ける扉、あざやかに見ゆるぞあはれなる。法花堂なんどもいまだ侍るめり。これも亦いつまでかあらん。かばかりの名殘だになき所々は、おのづから礎ばかり殘るもあれど、さだかに知れる人もなし。されば萬づに見ざらん世までを思ひおきてんこそはかなかるべけれ。

□折節のうつりかはり

折節のうつりかはるこそ、物毎にあはれなれ。「物のあはれは秋こそまされ。」と人毎にいふめれど、それもさるものにて、今ひときは心も浮きたつものは春の景色にこそあめれ。鳥の聲なども殊

の外に春めきて、のどやかなる日影に、垣根の草萠え出づる頃より、やゝ春深く霞み渡りて、花もやう〳〵氣色立つ程こそあれ、折しも雨風打續きて、心あわたゞしう散り過ぎぬ。青葉になり行くまで、萬づにたゞ心をのみぞ惱ます。花橘は名にこそ負へれ、なほ梅の匂にぞ古の事もたちかへり、戀しう思ひ出でらるゝ。山吹の清げに藤のおぼつかなきさましたる、すべて思ひ捨て難きこと多し。

水鷄

灌佛の頃、祭の頃、若葉の梢涼しげに茂りゆく程こそ、世のあはれも人の戀しさもまされと、人の仰せられしこそ、げにさるものなれ。五月あやめ葺く頃、早苗とる頃、水鷄のたゝくなど心細からぬかは。六月の頃、あやしき家に夕顔の白く見えて、蚊遣火ふすぶるもあはれなり。六月ばらへまたをかし。

灌佛　陰暦四月八日。

祭　賀茂祭。四月の中の酉の日。

六月ばらへ　六月晦日の大祓。



棚機祭るこそ艶かしけれ。

やう〳〵夜寒になる程、雁鳴きて來る頃、萩の下葉色づく程、わさ田刈り干すなど、取りあつめたる事は秋のみぞ多かる。又野分のあしたこそをかしけれ。いひつゞくればみな源氏物語、枕草子などに事ふりにたれど、同じ事又今更にいはじとにもあらず。おぼしき事いはぬは腹ふくるゝわざなれば、筆に任せつゝ、あぢきなきすさびにて、かいやり捨つべきものなれば、人の見るべきにもあらず。

さて冬枯の景色こそ、秋にはをさ〳〵劣るまじけれ。汀の草に紅葉の散りとゞまりて、霜いと白う置けるあした、遣水より烟の立つこそをかしけれ。

年の暮れはてて、人毎にいそぎあへる頃ぞ、又なくあはれなる。すさまじき物にして見る人もなき月の、寒けく澄める二十日餘り

御佛名　十二月十九日より二十一日まで三日間宮中に行はれた佛事。
荷前使　十陵八墓に幣帛を奉られる使。
追儺　十二月晦日に行はれた疫鬼をはらふ儀式。

の空こそ、心細きものなれ。御佛名、荷前の使立つなどぞ、あはれにやんごとなき。公事どもしげく、春のいそぎに取重ねて、催し行はるゝ樣ぞいみじきや。

追儺より四方拜に續くこそ面白けれ。晦の夜いたう闇きに、松どもともして、夜半過ぐるまで、人の門叩き走りありきて、何事にかあらんことゞしくのゝしりて、足を空に惑ふが、曉方よりさすがに音なくなりぬるこそ、年の名殘も心細けれ。亡き人のくる夜とて、魂祭るわざは、此の頃都には無きをあづまの方には尙する事にてありしこそあはれなりしか。かくて明けゆく空のけしき、昨日に變りたりとは見えねど、引きかへ珍しき心地ぞする。大路のさま松立てわたして、花やかに嬉しげなるこそまたあはれなれ。

（徒然草）



野口米次郎　愛知縣の人、明治八年生、慶應義塾大學教授、詩人。

## 一四　自然禮讃

野口米次郎

私は幼少の頃、既に茫漠たる大きな空の莊嚴美に打たれた。私の十一二歳の頃であつたであらうか、船に乘つて、鄕里の小河を下つて木曾川へ出て、それから四日市の海へ乘り出して、沙魚釣をやつたことがあつた。私は船の中で仰向けに寢そべつて、紫がかつた空を眺めた。私は、「空はいつたい何であらう。何から出來てゐるだらう。そして、空の彼方に何が住んでゐるだらう。」と思つた。又、「かういふ青々とした麗しい色は、どうして出來たものだらうか。」と不思議がつた。其の後長じて、十八九か二十歳の頃、北米は加州ヲークランドの山中に住んだ三箇年間といふものは、虎が寢そべつたやうな形の小山の上に横たはつて、十一二歳の時から私が自分の胸に抱いてゐた、天空に對する驚愕と嘆美とを續けた。其處

には質問だけがあつて、何處からもそれに對する返答はなかつた。今日、五十歳近くになつても、天氣が朗かで、空氣が澄んだ時、庭に面した廊下廻りの硝子から空を眺めては、幼少の頃の同じ疑問に頭を惱ますことがある。ウォヅウォースは、幼少の時代に虹を眺めると心が躍つたが、老年になつても、同樣の躍動を感ずると詩に書いてゐる。又人間の知識は、自然に對すると不思議にもその機能を失つて仕舞ふ。あゝ、だれが自然を理解することが出來よう。私共はたゞ自然を眺めて、且つ恐れ、且つ驚き、且つ嘆美禮讃するのみである。

私は、空の驚異を知つたと同時に、海の姿に對しても、不可思議な恐怖と驚歎とを感じた。大西洋上で氷山を見た時のことは、忘れることが出來ない。それは私の二十八九歳の頃で船で、リバプールを出帆して、米國のボストンへ向つた折であつた。時は春もや



つと目覺めたばかりの三月で、大西洋の北部は非常に荒れて難航海であつた。その中央へ出た頃には毎晩のやうに、汽笛を鳴らして氷山の危險を他船に傳へ、又他船から響く汽笛を聞いては、船は幾時間ともなく停留して動かなかつた。ある朝、どや〳〵と急ぐ澤山の船客の後を追つて甲板へ出た。あゝ、驚いた。私の眼前には、金剛石のやうに輝く巨大な氷山が横たはつて居た。そしてこの金剛石の巨山は、二つにぱつと分れて、悠然と右左に流れて行つた。壯觀といふ言葉はあるけれども、到底この光景は、壯觀の二字では盡され

北極圏の大氷山

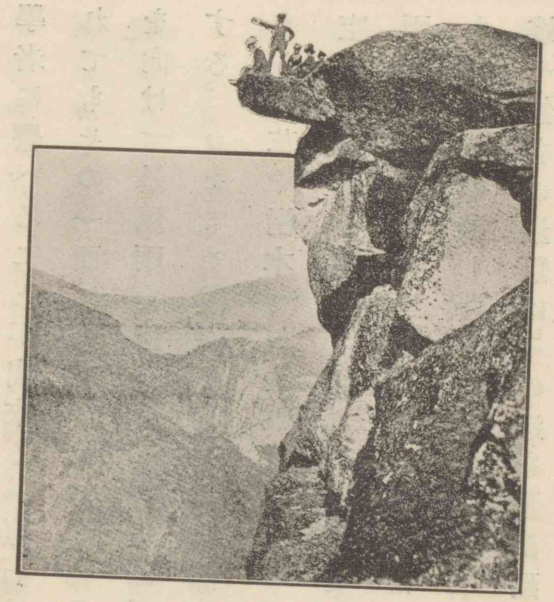
るものでは無い。全く宇宙の壯麗な現象は、この氷山に止めを刺すと私は思つた。「あゝ、大なるかな、自然よ。」と叫ばざるを得なかつた。その朝は、いくつもの氷山が、私共の船を追つかけたり、又船の進路を閉ぢたりした。洋上に浮動する氷山を實際に見ない人には、如何にそれが驚歎に値するかを語ることは出來ない。譬へていふと、巨大な海の守護門で、惡魔共が、人間の靈場へ入つて行くのを防いでゐるやうだ。

海を語つた私は、瀑布を語らねばならない。瀑布に關聯しては、溪谷を語らなければならない、山を語らなければならない、樹木を語らなければならない。私の念頭に第一に浮かぶのは、加州ヨセミテの大觀である。人間の築く殿堂が如何に立派でも、どうして自然の作品に比較することが出來よう。ヨセミテ溪谷を造つてゐる石壁を見よ。それは、宛も生きた動物でもあるかのやうに活



動飛躍してゐる。後に傾いてゐる巖石は、瞑想にはいつて休息する帝王の姿だ。直立數千尺もある巖石は、星を仰いで禮拜する哲學者に譬へることが出來る。巖石は一見接近し難いやうに思はれても、その一面に柔和で笑つてゐる所がある。巖石は平和な眼を向けて暴風雨を迎へる。巖石は愛の眼を向けて無名の花に接する。ヨセミテ溪谷の石壁は、脚部を見ると、青々とした水の滴るやうな草や樹木で包まれてゐる。そして見上げると、濃綠色の大空にその額を晒して居るのだ。その空は、加州人の自慢の空だ。雨や雪や風を友達とし、又は洪水に出遇つても自分の威嚴を損じない巖石の姿、しかも、かういふ巖石を少しも恐れずに、鳥や、蜂や、蝶蝶や、無名の蟲類は、その邊を飛び廻る。ヨセミテ溪谷の中央を一貫して流れるマーセット川を見よ。如何にそれが玉をも欺く清さであるか。四邊の草花は、その影を川の胸のなかに埋め、樹木は、

その毛髪を川の水鏡でくしけづつてゐる。あゝ、百景の妙を盡してゐるのはこの溪谷だ。自然の寶藏といつても決して過言でない。自然は有難い慈母だ。我々に自由を與へて、この寶器の選擇をほしいまゝにさせる。マーセット川は、海拔四千尺で、その上流が卽ち音に名高いヨセミテである。



ヨセミテ大谿谷中の奇觀

私がヨセミテ溪谷へ出掛けたのは、まだ二十三四歲の頃で、今日のやうに自動車の便が無い時代であつた。私はユータヴェール街道をてく〳〵歩いた。そこは、二三百尺にも達する樅や松の森で兩側が蔽はれて居る。又松柏科屬の王樣とも云はれる、偉大なセクッイアが澤山並立して居る。私は幾晩か、かういふ大きな樹下で野宿した。夜、風が樹葉を動かして、天の星が地上にぱつと光をなげる。私の耳に聞えるものは何であらう。……それは溪流の子守歌だ。私の床には、消えさうな白い雪が敷かれて居る、……だれが雪は冷たいといふ。私がこの自然の殿堂の間をさまようた經驗は私の一生の中で最も尊いものの一である。

私は、ある日の午後三時頃、いよ〳〵ヨセミテ溪谷に踏み込んだ。私の歩いてゐる道は屈曲九折して居る。一歩々々とその景色が變化百出する。私がその溪の水で口を嗽いだ時、何たる甘味を覺えたであらう。溪谷中の樹木は、愉快な香氣を放散して居る。その爽快さは、譬へやうもなかつた。私は間もなく水の巖石を打つ音に耳を欹てる。それは「花嫁かづきの瀑」である。高さ九百尺の

所から落ちて居る。西に入らんとする黄金の太陽の光を受けて、瀑布は虹のやうに輝き、水聲は、詩神が虹の彼方で彈ずる音樂でもあるかのやうに思はれた。この瀑布に對する一瀑布が、「處女の涙」として知られてゐる。此處を過ぎると、エル・キャプテンとて、高さ三千三百尺の天下に名高い花崗岩が前面に直立して居る。あゝ、かゝる石の大城壁が、何處にあるのであらうか。その側を過ぎり、北の方に「兄弟巖」とて、四千尺もあるものを見て、徐々とヨセミテ大瀑布へと進むのである。この時、天には星が輝き初め、水の聲が段段と自分の骨に徹して來るやうに覺えた。一歩は一歩、水聲が雷鳴の如くに響いて來る。目をつぶると、その響音が千里の遠方からでも來るやうに感じた。いよ〳〵大瀑布に接近すると、かすかに光線をはなつ朧月は、瀑布を銀色に照らして、恰も銀の蛇が中天に懸つてゐるやうであつた。ずどん〳〵と巖石を打つ。自分で



自分が解らない、惡魔にでも捕へられたやうな感じであつた。

翌朝、太陽が出てからヨセミテの谷を見る。人間はたゞその偉大さに恐れ戰いて、自然の前に跪くのみである。人間は畢竟小さな鳥にも劣る……鳥は瀑布の雷鳴にも恐れず、驚くべき自然の暗示にも戰かずに、巢をその側に構へて喃々と鳴いてゐる。知識を誇り、理知に生きる人間の價値は何だ。たか〴〵六七十年の生命しか持つことの出來ない人間は、無窮の自然に對すると、たゞ肉の一片に過ぎない。

詩人として私は、自分を空虛にして自然を眺めるといふことを信條として詩の仕事を始めた。言ひかへると、私は、詩の自然主義を詩人の出發點としたものだ。自分を玲瓏な玉とし、自分を曇らない鏡とし、自然は自分に映つて來るものと信じた。然るに、人生の何物であるかをいさゝか了解して來た今日の私としては、人生

を自然に對立させて考へる。自然を批判せずには眺めることが出來ないやうな氣がする。併し、私の自然禮讃の態度は少しも變らない。昔日のやうに熱が無く、昔日のやうに自然の動きを、私は嘆美しないかも知れないが、もつと大きな自然の靜止の光景を、今日眺めることが出來ることを喜んで居る。自然禮讃といふ四文字に過ぎないが、いくら禮讃しても、その眞價は禮讃し切れるものではない。私は自然に對すると、結局言葉のない沈默に入るのみだ。五十年もかゝつて私の自然に對して學んだことは沈默の二字あるのみだ。

（自然禮讃）

日は香爐を照らして紫煙を生ず　遙かに看る瀑布長川を挂くるを
飛流直下三千尺　疑ふらくは是れ銀河の九天より落つるを

（李白）



臼田亞浪
名は卯一郎、長野縣の人、明治十二年生、俳人。

## 一五　亞浪俳話

臼田亞浪

「や、金魚の子が大きくなりましたね、ていかかづらも咲いてますね。かうやつてじつと見てますと、何とも言へないしいんとした氣持になつて、一句出來たら……と言ふやうな氣がしますね……俳句は一體むづかしいもんですか。」

金魚

「俳句かい、さうさね、むづかしいと言へばむづかしいし、造作もないと言へば造作もないよ。まあ、入り易いが、成り難いとでもいふかね……一寸俳句らしいものなら、誰にも出來るよ。」

「らしい俳句で結構ですが、どうすりや出來るんですか。むづかしいつて言ふのはやかましい規則でもあるんですか。」

「四角四面の改まつた規則とは違ふが、自ら約束づけられた約束はある。それは元來和歌といふ母胎から產まれ出たからで、その上の句が獨立した結果、形の上では十七音の定型律が俳句としての要件の一つとなつてゐる。十七音と言つても、何も一から十まで十七音でなくてはならないと言ふのではない。時としては一音位少くても、また一音や二音多くても構はない。大體十七音の心持で味はへればいゝのだ。卽ち廣義の十七音をいふのである。因襲に囚はれた多くの人は五七五調と唱へて、是非とも五七五音に刻み込まねばならないやうに考へてゐるが、決してそのやうな鑄型の出來てゐるものではない。もし音律上の單位を求めようとするならば、も少し細かく言葉の單位にまで還るべきである。さもなくては到底微妙なリズム感の味はへるものではない。和歌の上の句の多くが十七音の五七五調だとて、そこまで鐵則的に



遵奉せねばならないと言ふやうな約束のあるものでなく、またそれ程窮屈なものでもない。中には五七五調ではない二句一章がその形式だといひ張つた者もあるが、それも考へ方である。これまでの俳句の多くは『二つの事物の取合せ』といふ點から自ら二句一章になる傾はあつたが、さりとて總べてに當てはまる標語ではなかつた。それ故、僕は十七音一句一章の一行詩といふことを新に提唱して今日に及んでゐるのだ。五七五調にならうが、二句一章にならうが、それは出來たとこ勝負である。强ひても五七五調に刻み込んだり、二句一章にはめ込まうとするのは、延いて肝腎の中味を傷つけるおそれがある。と言つて、形式上自由律を奉ずる人々の

ひるまで寢てしまふ雪解風吹く藪の音する。　碧梧桐

霜の橋學校がはじまる。　井泉水

かうしたものは、おなじく詩は詩であつても、あるひは長過ぎたり、あるひは短過ぎたりして、俳句とは言ひかねる。それに俳句は定型律の詩だといつても、僕等のやうに一句一章と廣義に解して居れば、十分表現上の自由が期待される。自分としては少しも窮屈を感じたやうなことはない。」

「あゝ、さうですか。さう言ふもんですか……で、中味ですね、內容つてますか、それはどうすればいゝんですか。我々に、かう手つ取りばやく言つて見て下さい。」

「まあ、一口にいへば、自然禮讃の短詩とでもいふかね。自然の現象に驚きの眼を見張つた時とか、心に何か感激の湧き上つた時、その感激を象徴する自然の姿にぶつかつた場合とかに、ようく心を潜めてその中心となつた情景をつかんで、それを十七音に打出してゆけばいゝんだ。そこで、お互に僕等は自然の移り變りに伴な



つて様々に生活の有様が違ふのであるが、それが卽ち季節的意識から來る感じの現れで、それを十七音の言葉(卽ち文字)によつて現したのが俳句であるのだ。さうした點から、その內容を標語的に簡約して、季感ともいひ、また季意識とも言つてゐるが、僕は綜合的に解り易く自然感と言つてゐる。それからそれへとやかましい理窟をいへばいくらでも理窟はあるが、僕は自然感が普遍的な言葉だと思つてゐる。

らづかかいて

たれでもさうだが、ひよつとした上面の感じには、往々季節的意識に觸れない場合もあるが、靜觀的な態度のもとに、じつと思を潜めれば、必ず季節的な現象に到り着くものだ。題詠的な遊戯氣分を含んだ季題、または季そのものを普遍的に具象した金魚とか、ていかかづらとか、暑いとか涼しいとか

言ふ言葉、卽ち季語のみを必須的條件として、それさへあれば何でも彼でも俳句と思ふやうな人々は、所詮季語の概念に出頭沒頭する季語感想の詠歎者で、文字の遊戯を出でないものだ。遊戯と言つても、いのちを打込んだ遊戯は、卽ち眞劍な純一無雜な遊戯は、心の姿からいへば藝術的心境ではあるが、隱居や閑人の慰と思ふやうな態度の製作は、よくいつて趣味の程度を出ない五十步百步の遊事で、いのちも生活もあつたものではない。一體人生生活を離れて藝術はあるものでなく、いのちが籠らなくて胸へ響く力のありやうはずはない。我々の責務生活から產まれてこそ久遠の生命が宿るのである。そしてその生活は、時々刻々に日に月に季節的變化の影響を受けてゐるのであるから、內容に自然感のあるべきは必然な事態といふべきである。ねさうだらう。」

「え、解りました。さう言へば、まあ、當り前の事を、當り前の言葉で、



文字に移せばいゝ譯ですな。だが、十七音にまとめると言ふことは、慣れないと面倒ですな。……この金魚なり、ていかかづらなり、一寸、句にして見て下さいませんか。」

「それや、何でもない。……いゝかね、金魚の子が金魚らしい形になつてゐるだらう。そこで、夕方になつたらう、さうして涼しい風がそよ〳〵吹いてるだらう。……で、これを見てゐると、何とも言へない淸々しい氣持がするだらう。そこだ、いゝかね。

夕風や形つくりし金魚の子。

だらう。どうだい、見たまゝ感じたまゝを、見たまゝ感じたままの言葉で表したに過ぎないだらう。それで、この句を讀み返し、讀み返して見給へ、いゝ氣持になつてくるに相違ない。」

「え、さうです、その通りです。……だが、我々には、さう無造作にはゆきさうもありませんな。……も一つていかかづらで作つて見

てください。」

「さうか。ぢやあ、ていかかづらで作つて見せよう。……ね、月が出て來たらう、もう夜になつたね、で、そこを見給へ、その暗い土の上、に、ぽち〳〵と白くていかかづらの花がこぼれてゐるだらう。それだ、いゝかね。……えゝと……。

よひ月やていかかづらのこぼれ花。

は、どうだね。夕涼の感じが出てゐるだらう。

「なる程、造作もないんですね。一つやつて見ませう。懸命にやりや、どんなむづかしいことでも、やれない事ありませんや。」

（東京日日新聞）

梅雨の晝母よ〳〵と子の泣ける　亞浪



蕪村　谷口氏、播津の人、天明三年歿、俳人。

蓼太　大島氏、江戸の人、天明七年歿、俳人。

## 一六　天明の俳句

菜の花や月は東に日は西に　蕪村

春の海ひねもすのたりのたりかな

時鳥平安城を筋かひに

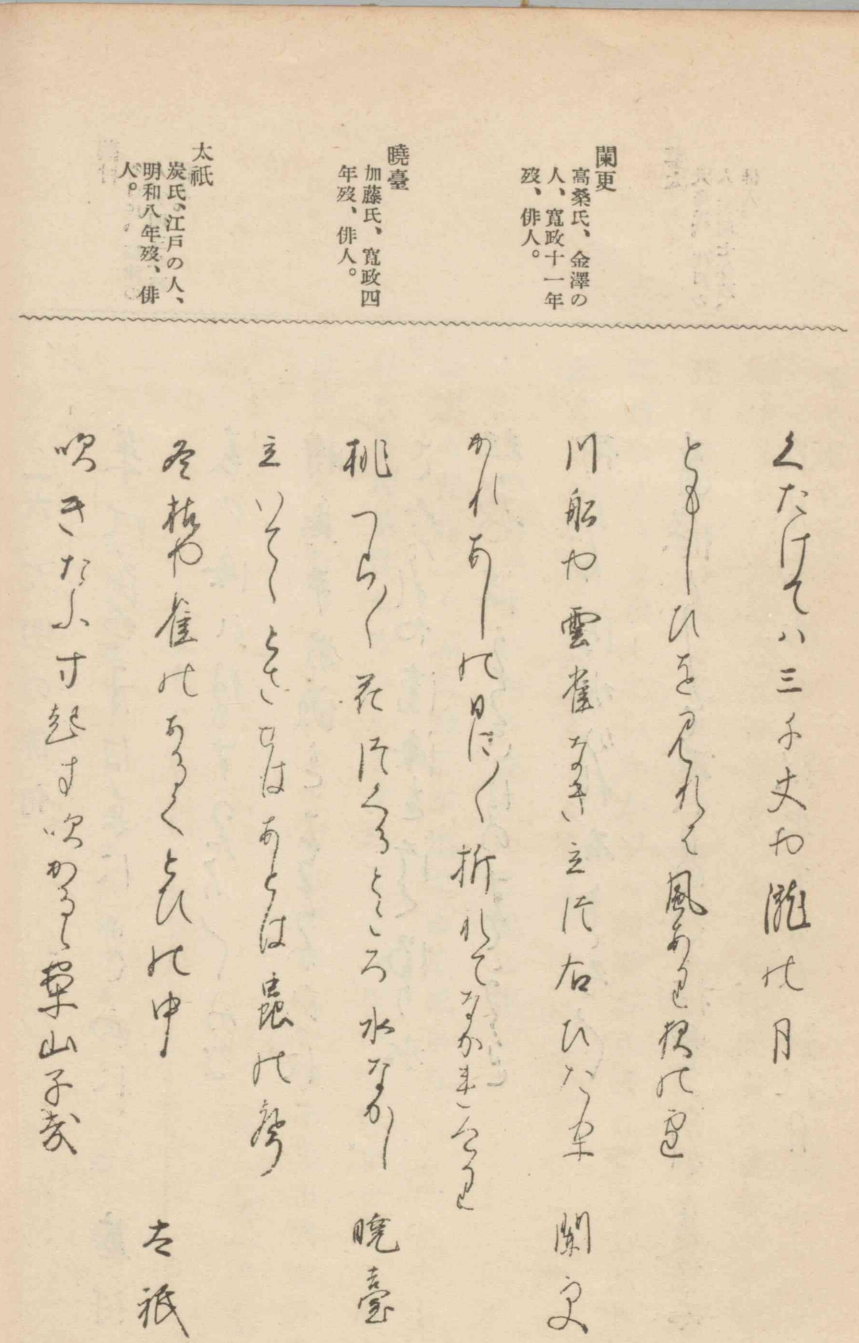
さみだれや大海を引く川の水

短夜や浦うちはのすてこぶね

柳ちる清水かれ石ところ〴〵

蓼食て蛍の行や草の葉

五月雨や大河を前に家二軒　蓼太



蘭更　高桑氏、金澤の人、寛政十一年歿、俳人。

曉臺　加藤氏、寛政四年歿、俳人。

太祇　炭氏、江戸の人、明和八年歿、俳人。



小泉八雲　本名、ラフカヂオハーン。英國アイルランドの人。日本に歸化して姓名を改めた。東京帝國大學文科大學講師、明治三十七年歿、英文學者。

洞光寺　松江市雜賀町にある曹洞宗の寺。

## 一七　松江の曉

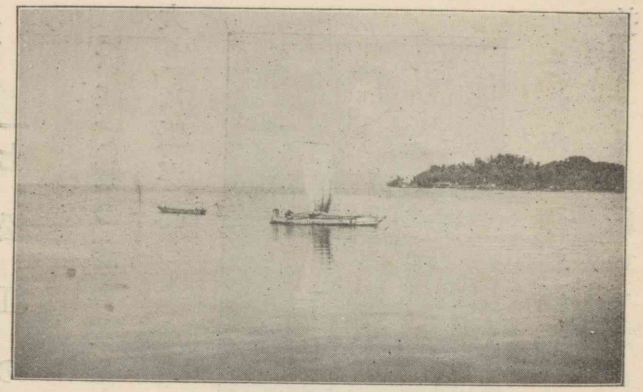
小泉八雲

松江で朝の夢を破る最初の物音は、ちやうど耳底で、ゆるやかな大きな脈が搏つたやうに響いてくる米搗の音である。杵の落ちる響が、一定の拍子で洩れてくるのが、日本人の日常生活に伴なふあらゆる音響の中で、最も哀れに思はれる。米搗の音は日本といふ國土の脈搏である。

小泉八雲

それから禪刹洞光寺の大きい鐘が、どうんと響いて、市街の空を搖がせる。續いて私の家に近い材木町の地藏堂から、太鼓の淋しげな音が晨の勤行を告げる。最後に、行商人の物賣の聲。「大根やい。」「蕪菁や蕪菁。」「薪や薪。」

明方のこんな物音に起されて、私は二階の障子を開けて、河畔の底から伸びた春の若葉の、軟かな綠の葉越しに朝景色を眺めやつた。大橋川の、幅廣い、鏡のやうな河口が、遠くの方では、わなゝくやうに萬象を映寫して微かに光つてゐる。此の川は、宍道湖に向つて口を開け、湖は右手へ擴がつて、杳乎たる連丘に包まれてゐる。對岸の日本の家屋は戸が皆閉つてゐるので、恰も箱を閉ぢたやうである。夜は明けたが、日はまだ出ない。遙かに見渡すと、薄色の霞が湖水の盡端に長くたなびいてゐる。その星雲狀をした長い帶は、日本の昔の畫で見る通りであるが、實際の



宍道湖

大橋川
中海と宍道湖との間を通ずる川。



現象を眺めたことのない者には、畫工が奇を衒つたとしか思はれないに相違ない。山といふ山をこの霞が蔽うて、峰から峰へ、はて知らぬ長さの紗のやうに横に延びて居る。だから湖水は、實際より遙かに大きく、味爽の空の色と入交つた美しい幻の海となつて見える。山々は霧の中に浮かぶ島嶼で、夢の樣な一帶の丘陵は、果しない土手道かと怪しまれる。そして霧が立つに連れて、その趣はおもむろに變つて行く。朝日の黃色の緣が見えてくると、今までのよりは更に弱い、細かな光線——分光鏡の紫と青貝色——が水面を射る。梢の上は弱い光を受ける。水のかなたにある高い建物の木地の色が、美しい靄の爲に、蒸氣の立つ黃金色へとかはる。

朝日の方へ向くと、澤山橋桁の並ぶ長い木造の大橋の彼方に、一艘の船が、今しも帆を揚げようとしてゐる。こんな奇妙な恰好の美しい船を見た例がない。正にこれ蓬萊の夢である、霞にぼやけ

た船の精靈である。しかし此の精靈は、雲と同樣、光線を受けて、薄青い光の中で金色に震へてゐる。

庭先の川端から、手を拍つ音が起つて來る。一回、二回、三回、四回、その手の持主は植込に遮られて見えない。しかし、對岸の埠頭の石段を下りる男や女の姿が見える。めい〳〵、帶に小さい青手拭を挿んでゐて、顏と手を洗ひ、口を漱ぐ。これは神道の祈を捧げる前に、必ず行ふ潔齋である。それから顏を朝日に向け、四たび手を拍つて拜む。長い橋の上からも、他の拍手の音が反響の如くに出てくる。遠くにある、輕い優美な、そして新月のやうに彎曲した小舟からも出てくる。この頗る異樣な恰好の舟の上から、手も足も裸の漁師が、黃金色をした東雲の空を拜んでゐるのである。最早拍手の數が增して、殆ど鋭い音響の連發となつた。それは人々が、今皆、朝日――お日樣――天照大神を拜んでゐるからである。「いとも貴き日の造り主よ。この心地よき日光を賜ひて、世界を麗しくなし給ふことを謝し奉る。」言葉はこの通りでないまでも、これが無數の人の衷心である。

朝日に向つてだけ手を拍つ者もあるが、大概は、西の杵*築の大社に向つても、さうするのである。顏を東西南北に向けて、群神の名を低聲で唱へる者さへ隨分ある。天照大神を拜んだ後、一*畑山の高峰を眺めて、盲人の眼を開き給ふといふ藥師如來の大伽藍のある處に向ひ、今度は佛敎の儀式に從ひ、掌を合せて輕く擦るものもある。しかし、日本で最古の此の國では、佛敎徒も亦神道信者であるから、誰も〳〵古風な神道の祈の文句を唱へる。

「拂ひ給ひ、淨め給へ。とほ神ゐみため。」

手を拍つ音が止んで、一日の仕事が始まり出し、橋の上には、からころといふ下駄の音がだん〳〵高く響いてくる。大橋の上で鳴

杵築の大社　官幣大社出雲大社、祭神は大國主命。

一畑山　島根縣簸川郡にある名刹。

る下駄の音は忘れられない音である。――速くて、陽氣で、音樂的で盛な舞踏の音のやうである。實際また舞踏である。みんながみんな爪先で歩いて行く。朝日の射した橋の上を通る、數へきれぬ人の足がちら〳〵するのは驚くべき光景である。この足は皆細くて、恰好な均齊を得てゐて希臘の古甕に描いた人物の足のやうに輕やかである。

やがて學校へ急ぐ子供達が出てくる。彼等の駈ける時に、綺麗な飛白の着物の潤い袖が波動するのは、ちやうど大きい蝶が羽搏きをするやうである。親船は、白色や黄色の大き翼を擴げるし、埠頭の側で夜中眠つてゐた小蒸氣船は、煙筒から煙を吐き始める。

（小泉八雲全集）



吉村冬彦
本名寺田寅彦、高知縣の人、理學博士、東京帝國大學教授。

# 一八　田園雜感

吉村冬彦

## 一

田舍の自然は確かに美しい。空の色でも、木の葉の色でも、都會で見るのとはまるでちがつて居る。さういふ美しさも、馴れるとと美しさを感じなくなるだらうといふ人もあるが、さうとは限らない。自然の美の奥行はさう見すかされ易いものではない。永く見て居れば居る程、いくらでも新しい美しさを發見する事が出來る筈のものである。出來なければそれは眼が弱いからであらう。一年や二年で見飽きるやうなものであつたら、自然に關する藝術や科學は、數千年前に完結してしまつて居る筈である。六つになる親類の子供が、去年の暮から東京へ來て居る。これに東京と國とどつちがいゝかと聞いて見たら、お國の方がいゝと云つた。ど

うしてかと聞くと、「お國の川にはえびが居るから。」と答へた。この子供のえび」と云つたのは、必ずしも動物學上のえびの事ではない。えびの居る清冽な小川の流、それに翠の影を浸す森や山、河畔に咲き亂れる草の花、さういふやうなもの全體を引つくるめた田舍の自然を象徴するえびでなければならない。東京で魚屋から川鰕を買つて來て、この子供にやつて見れば、此の事は容易に證明されるだらう。私自身も此のえびの事を考へると、田舍がこひしくなる。併しそれは現在の田舍ではなくて、過去の思ひ出の中にある田舍である。えびは今でも居るが「子供の私」はもう其處には居ないからである。併し此の「子供の」私は、今でも「大人の私」の中の何處かに隱れて居る。そして意外な時に出て來て外界をのぞく事がある。例へば郊外を歩いて居て、道端の名もない草の花を見る時や、或は遠くの杉の木の梢の神秘的な色彩を見て居る時に、僅



かの瞬間だけではあるが、此のえびの幻影を認める事が出來る。それが消えたあとに殘るものは、淡い「時の悲しみ」である。自然くらゐ人間に親切なものはない。そして其の親切さは田舍の人の親切さとは全く種類のちがつたものである。都會には此の自然が缺乏して居て、其の代りに田舍の「人」が入り込んで居るのである。

## 二

夏の盛りに蟲送りといふ行事が行はれる。大きな太鼓や鐘が畔道に据ゑられて、赤裸の人間が力に任せてそれをたゝく音が、四方の山から反響し、家の戸障子に劇しい衝動を與へる。空には火炎のやうな雲の峰が耀いて居る。朱を注いだやうな裸の皮膚には汗が水銀のやうに光つて居る。

凡てがブランギン*の油繪を想ひ出させる。耳を聾するやうな音と、眼を眩するやうな光の強さは、其の中に却て澄み透つた靜寂

ブランギン　英國現代の畫家。

を醸成する。唯それはものの空虛な爲の靜けさでなくて、ものの充實し切つた時の不思議な靜けさである。烈しい音波の衝動の爲に、害虫が果してふるひ落され、ふるひ落された蟲がそれ切りになるかどうか、たしかな事は誰も恐らく知らなかつた。しかしこんな事はどうでもいゝやうな氣がする。あれは或る無名の宗教の莊重な儀式と考へるべきものである。

## 三

鄕里から餘り遠くないA村に木の丸神社といふのがある。これは齊明天皇を祭つたものだと云はれて居る。天皇が崩御になつた九州の或地方の名が卽ち此の村の名になつて居る。どういふ譯で、此の南海の片隅の土地が天皇と結び付けられるやうになつたのか、私は知らない。たしかな事は恐らく誰にも解るまい。それにも拘らず、かういふ口碑は人の心を三韓征伐の昔に誘ふ。



そして現代の事相に古い民俗的の背景を與へる。此の神社の祭禮の儀式が珍しいものであつた。子供の時分に一二度見ただけだから、もう大部分は忘れて了つたが、夢のやうな記憶の中を捜すと、こんな事が出て來る。矢張り農家の暇な時季を選んだものだらう。儀式は刈株の殘つた冬田の上で行はれた。其處に神輿が渡御になる。それに從ふ村中の家々の代表者はみんな裃を着て、傘程に大きな菅笠のやうな物を冠つて居た。そして左の手に小さな鉦をさげて右の手に持つた木槌でそれを叩く。單調な聲で緩やかな拍子で「ナンモーンデー」と唱へると、鉦の音がこれを請けて「カーンコ」と響くのである。どういふ意味だか解らない。或人は「南門殿還幸」を意味すると云つて居たが、それは餘り當にならない。私は寧ろ意味の解らない方がいゝ氣がして居た。神輿の前で相撲がある。併しそれは相撲をとるのではなくて相撲を取ら

ないのである。美々しい廻しを付けた力士が堂々と睨み合つて、いざ組まうとすると、衛士だか行司だかが飛び出して引分け引止める。さういふ事が何度となく繰返される。そして結局、相撲は取らないでおしまひになるのである。どういふ由緒から起つた行事だか私は知らない。それにも拘らず、それを見る人の心は遠い昔に起つた或何かしら、かなり深刻な事件のかすかな反響の樣なものを感ずる。その外「棒使ひ」と云つて、神前で紅白の布を卷いた棒を振廻す儀式もあつたが、詳しい事はもう覺えて居ない。文明の波が潮のやうに片田舍にも押寄せて來て、固有の文化の名殘は大抵流してしまつた。「ナーンモーンデー」の儀式もいつの間にか廢止された。學校へ行つて文明を敎はつて居る村の青年達には、裃をつけて菅笠をかむつて、無意味なやうな「ナーンモーンデー」を唱へる事は堪へ難い屈辱であり、自己を野蠻化する所行のやう



に思はれたのである。これは無理のない事である。簡單な言葉と理窟で、手早く誰にも解るやうに說明の出來る事ばかりが、文明の陳列棚の上に美々しく並べられた。さうでないものは塵塚に捨てられ、存在をさへ否定された。それと共に、無意味の中に潛んだ重大な意味の可能性は葬られてしまふのである。幾千年來傳はつた民族固有の文化の中から、常に新しい者を取り出して、新しくそれを展開させる人は何處にもなかつた。「改造」といふ叫聲は內にあるものの生長發達ではなくて、木に竹をつぐやうな意味にのみもて囃された。それであの親切な情誼の厚い田舍の人達は、切つても切れぬ祖先の魂と影とを弊履の如く棄ててしまつた。さうして自分とは緣のない、遠い異國の歷史と背景が產み出した新思想を輸入して居る。

傳來の家や田畑を賣拂つて、株式に手を出すと同じ行き方であ

る。新思想の本元西洋へ行つて見ると、却て日本人の眼に馬鹿馬鹿しく見えるやうな大昔の習俗や行事が、其の儘に行はれて居るのは寧ろ不思議である。これはどちらがいゝか、議論すると解らなくなるにきまつてゐる。さうした田舍の塵塚に朽ちかゝつて居る祖先の遺物の中から、新しい生命の種子を拾ひ出す事が、吾々の當面の仕事ではあるまいかといふ氣もする。

（冬彦集）

ことわりなきがことわりのまことなり。ことわりのごと行はるゝものならば、何の難きこともあらじを、さも知らで人と爭ひ、政を譏りなどしてたかぶるものは、ことわりのまことを知らぬとやいふらん。

（花月草紙）



谷崎潤一郎　東京の人、明治十九年生、小説家。

左丘明　周代魯の人。孔門の一。春秋左氏傳を著した。

孟軻　周代鄒の人。世に孟子といふ。孔子の孫なる子思の門人に學んだ。孟子を著した。

司馬遷　前漢の人。世に太史公といふ。史記を著した。

# 一九　麒麟

谷崎潤一郎

西暦紀元前四百九十七年、左丘明・孟軻・司馬遷等の記錄によれば、魯の定公が十三年目の郊の祭を行はれた春の始、孔子は數人の弟子たちを車の左右に從へて、その故鄉の魯の國から傳道の途に上つた。

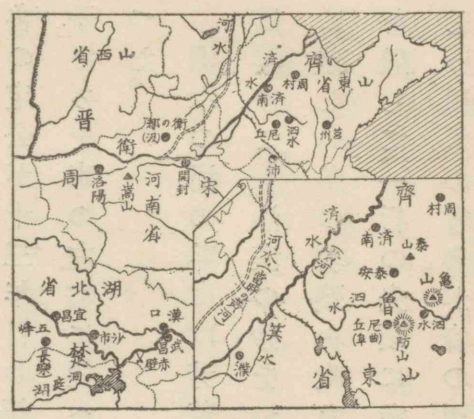
泗水の河の畔には芳草が青々と芽ぐみ、防山・尼丘・五峰の頂の雪は溶けても、沙漠の砂をつかんで來る匈奴のやうな北風は、いまだに烈しい冬の名殘を吹き送つた。元氣の好い子路は紫の貂の裘を飜して、一行の先頭に進んだ。考深い眼つきをした顏淵、篤實らしい風采の曾參が、麻の履を穿いてその後に續いた。正直者の御者の樊遲は、駟馬の銜を執りながら、時々車上の夫子が老顏を竊み視て、傷ましい放浪の師の身の上に涙を流した。

われ魯を望まんと欲すれば云々　支那の琴曲の歌。

或日愈一行が魯の國境までやつて來ると、誰も彼も名殘惜しさうに、故郷の方をふり返つたが、通つて來た路は龜山の蔭に隱れて、見えなかつた。すると孔子は琴を執つて、

*われ魯を望まんと欲すれば、
龜山これを蔽ひたり。
手に斧柯なし。
龜山をいかにせばや。

かういつて、寂びたしはがれた聲で唄つた。




それからまた幾日も幾日も長い旅を續けて、箕水の流を渉つた。夫子が戴く錙布の冠は埃にまみれ、狐の裘は雨風に色あせた。

「魯の國から孔丘といふ聖人が來た。その人は暴虐な私たち



の君や、妃に、幸な敎と賢い政を授けてくれるであらう。」

衛の國の都に入ると、巷の人々はかういつて、一行の車を指さした。その人々の顏は饑と疲に瘦せ衰へ、家々の壁は嗟きと悲しみの色をたゝへてゐた。その國の麗しい花は、宮殿の妃の眼を喜ばすために移し植ゑられ、肥えた豕は妃の舌を培ふために召上げられ、長閑な春の日が、灰色に寂れた町を徒に照らした。さうして都の中央の丘の上には、五彩の虹を繡ひ出した宮殿が、血に飽いた猛獸の如くに、屍骸のやうな街を瞰下してゐた。その宮殿の奥で打鳴らす鐘の響は、猛獸の嘯くやうに國の四方へとゞろいた。

「*由や、お前にはあの鐘の音がどう聞える。」

と、孔子はまた子路にたづねた。

「あの鐘の音は、天に訴へるやうなはかない先生の調とも違ひ、天にうち任せたやうな自由な*林類の歌とも違つて、天に背いた

由　字は季路（子路）由はその本名。孔子の門人。

林類　老子の徒、世に隱れ野に耕してゐた逸民、この傳道の途上、子路と道を問答したことがある。

歡樂を讃へる、恐しい意味を歌うて居ります。」

「さもあらう。あれは昔衛の襄公が、國中の財と汗とを絞り取つて造らせた林鐘といふものぢや。その鐘が鳴る時は、御苑の林から林へ反響して、あのやうな物凄い音を出す。また暴政に苛まれた人々の呪と涙が封じられてゐて、あのやうな恐しい音を出す。」と、孔子は教へた。

衛の君の靈公は、國原を見晴らす靈臺の欄に近く、雲母の硬屏、瑪瑙の榻を運ばせて、青雲の衣を纏ひ、白霓の裳裾を垂れた夫人の南子と、香の高い秬鬯を酌み交しながら、深い霞の底に眠る野山の春を眺めてゐた。

「天にも地にも、うらゝかな光が泉のやうに流れてゐるのに、何故私の國の民家では美しい花の色も見えず、快い鳥の聲も聞えないのであらう。」



堯 帝堯陶唐氏。支那古代の聖帝。
舜 帝舜有虞氏。堯の後を繼いだ聖帝。
皐陶 舜に仕へた賢臣。
子產 支那春秋時代鄭國の賢相。
禹 支那古代の聖王。夏の國の始祖。

かういつて、公は不審の眉を顰めた。

「それはこの國の人民が、我が公の仁德と、我が夫人の美容を讃へる餘り、美しい花とあれば悉く獻上して宮殿の園生の墻に移し植ゑ、國中の小鳥までが、一羽も殘らず花の香を慕うて、園生のめぐりに集まるからでございます。」

と、君側に控へてゐた雍渠が答へた。するとその時、寂れた街の靜けさを破つて、靈臺の下を過ぎる孔子の車の玉鑾が珊々と鳴つた。

「あの車に乘つて通るものは誰であらう。あの男の額は堯に似てゐる。あの男の目は舜に似てゐる。あの男の項は皐陶に似てゐる。肩は子產に類し、腰から下が禹に及ばぬこと三寸許である。」

と、これも側に伺候してゐた將軍の王孫賈が、驚きの眼を瞠つた。

「しかし、まあ、あの男は、なんといふ悲しい顏をしてゐるのだら

う。將軍、卿は物識だから、あの男がどこから來たかわたしに教へてくれたがよい。」

かういつて、南子夫人は將軍を顧み、走り行く車の影を指さした。

「私は若い頃諸國を遍歴しましたが、周の史官を勤めてゐた老聃といふ男の他には、まだあれほど立派な相貌の男を見たことがありませぬ。あれこそ故國の政に志を得ないで、傳道の途に上つた魯の聖人の孔子であらう。その男の生まれた時、魯の國には麒麟が現れ、天には和樂の音が聞えて、神女が天降つたといふ。その男は牛の如き唇と、虎の如き掌と、龜の如き背とを持ち身の丈が九尺六寸あつて、*文王の容體を備へてゐるといふ。彼こそその男に違ありませぬ。」

かう王孫賈が説明した。

「その孔子といふ聖人は、人にいかなる術を教へるものである

文王 支那古代の聖君。周の始祖武王の父。



か。」

と、靈公は手に持つた盃を乾して、將軍に問うた。

「聖人といふものは、世の中のすべての知識の鍵を握つて居ります。しかし、あの人は、專ら家を齊へ、國を富まし、天下を平げる政の道を諸國の君に授けると申します。」

將軍が再びかう説明した。

「わたしは四方の財寶を萃めてこの宮殿を造つた。この上は天下に覇を唱へて、この宮殿にふさはしい權威を持ちたく思うてゐる。どうかしてその聖人をこゝへ呼びいれて、天下を平げる術を授かりたいものぢや。」

と、公は卓を隔てて對してゐる夫人の面をうかゞつた。

孔子の一行が北宮の前にさしかゝつた時、賢い相を持つた一人の官人が、大勢の供を從へ、*屈産の駟馬に鞭うち、車の右の席を空け

屈 晉の地名、良馬を產する。

て、恭しく一行を迎へた。

「私は靈公の命を受けて、先生をお迎に出た仲叔圉と申すものでございます。先生がこのたび傳道の途に上られたことは、四方の國々までも聞えて居ります。長い旅路に先生の翡翠の蓋は風に綻び、車の軛からは濁つた音が響きます。願はくはこの新しい車に召替へられ、宮殿に駕を枉げて、民を安んじ國を治める先王の道を、我等の公に授け給へ。先生の疲勞を癒すためには、西圃の南に水晶のやうな溫泉が沸々とたぎつて居ります。先生の咽喉を濕すためには、御苑の園生に芳しい柚・橙・橘が甘い汁を含んで實のつて居ります。先生の舌を慰めるためには、苑囿の檻の中に、肥え太つた豕・熊・豹・牛・羊が蓐のやうな腹を抱へて眠つて居ります。願はくは二月も、三月も、一年も、十年も、この國に車を駐めて、愚かな私たちの曇つた心を啓き、盲ひた眼を開き



給へ。」

と、仲叔圉は車をおりて慇懃にあいさつをした。

「私の望むところは、莊麗な宮殿を持つ王者の富よりは、三王の道を慕ふ君公の誠であります。萬乘の位も桀紂の奢のためにはなほ足らず、百里の國も堯舜の政を布くには狹くはありませぬ。靈公がまことに天下の禍を除き、庶民の幸を圖る御志ならば、この國の土に私の骨を埋めても悔いませぬ。」

かく孔子は答へた。

やがて一行は導かれて、宮殿の奥深く進んだ。一行の黑塗の沓は、塵も止めぬ砥石の床に戞々と鳴つた。

摻々たる女手、

以て裳を縫ふべし。

と、聲をそろへて歌ひながら、大勢の女官が梭の音たかく錦を織つ

桀紂 夏の桀王と殷の紂王、共に暴虐の君で國を亡ぼしてしまつた。

摻々たる 詩經魏風葛屨篇の句。

てゐる織室の前も通つた。錦のやうに咲きこぼれた桃の林の陰からは、苑囿の牛の懈げに呻る聲も聞えた。

靈公は賢人仲叔圉のはからひを聽いて、夫人を始め一切の女を遠ざけ、歡樂の酒のしみた唇を濯ぎ、衣冠正しく孔子を一室に請じて、國を富ましし、兵を強くし、天下に王となる道を質した。

しかし、聖人は人の國を傷つけ、人の命を損ふ戰のことに就ては、一言も答へなかつた。また民の血を絞り、民の財を奪ふ富のことに就いても教へなかつた。さうして軍事よりも、產業よりも、第一に道德の貴いことを嚴かに語つた。力を以て諸國を屈服する覇者の道と、仁を以て天下を懷ける王者の道との區別を知らせた。

「公がまことに王者の德を慕ふならば、何よりもまづ私の慾にうち克ち給へ。」

これが聖人の誡であつた。



その日から靈公の心を左右するものは、夫人の言葉でなくつて聖人の言葉であつた。朝には廟堂に參じて正しい政の道を孔子に尋ね、夕には靈臺に臨んで天文四時の運行を孔子に學んだ。

錦を織る織室の梭の音は、六藝を學ぶ官人の弓弦の音に、蹄の響は篳篥の聲に變つた。一日公は朝早く獨り靈臺に上つて國中を眺めると、野山には美しい小鳥がさへづり、民家には麗しい花が咲き、百姓は畑に出て公の德を讃へ歌ひながら、耕作にいそしんでゐるのを見た。公の眼からは熱い感激の涙が流れた。

（麒　麟）

子禽子貢に問うて曰く、「夫子是の邦に至るや、必ずその政を聞けり。之を求めたるか、抑之を與へたるか。」と。子貢曰く、「夫子は溫・良・恭・儉・讓以て之を得たり。夫子の之を求むるや、其れ諸れ人の之を求むるに異なるか。」と。（論　語）

## 一〇 論語抄

曾子曰く、吾日に三たび吾身を省みる。人の爲に謀りて忠ならざるか。朋友と交りて信ならざるか。傳へて習はざるかと。

子曰く、君子は重からざれば則ち威あらず。學べば則ち固ならず。忠信を主とし、己に如かざるものを友とするなかれ。過ちては則ち改むるに憚ることなかれ。

子曰く、故きを溫ねて新しきを知る、以て師となすべし。

子曰く、學んで思はざれば則ち罔し。思うて學ばざれば則ち殆し。

子曰く、人にして信無ければ、其の可なるを知らざるなり。大車輗無く、小車軏無くんば、それ何を以て之を行らん。

子曰く、士、道に志して惡衣惡食を恥づるものは、未だともに議するに足らざるなり。

子曰く、賢を見ては齊しからんことを思ひ、不賢を見ては內に自ら省みる。

子曰く、德は孤ならず、必ず鄰あり。

子曰く、賢なるかな回や、一簞の食、一瓢の飲、陋巷に在りて人は其の憂に堪へず。回や其の樂しみを改めず。賢なるかな回や。

子曰く、質、文に勝てば則ち野なり。文、質に勝てば則ち史なり。文質彬々として然る後君子なり。

子曰く、憤せざれば啓せず。悱せざれば發せず。一隅を擧げて三隅を以て反せざれば復せざるなり。

曾子曰く、以て六尺の孤を託すべし。以て百里の命を寄すべし。大節に臨みて奪ふべからざるなり。君子人か、君子人なり。

子曰く、譬へば山を爲るが如し、未だ一簣を成さずして止むは吾

が止むなり。譬へば地を平かにするが如し、一簣を覆すと雖も進むは吾が往くなり。

子貢問ふ、師と商と孰か賢れると。子曰く、師や過ぎたり、商や及ばずと。曰く、然らば則ち師愈れるかと。子曰く、過ぎたるは猶、及ばざるが如し。

孔子

子曰く、君子は人の美を成し、人の惡を成さず。小人は是に反す。

子曰く、剛毅木訥は仁に近し。

子曰く、古の學ぶ者は己の爲にし、今の學ぶ者は人の爲にす。

子曰く、與に言ふべくして之と言はざれば人を失ふ。與に言ふべからずして之と言へば言を失ふ。知者は人を失はず、亦言を失はず。

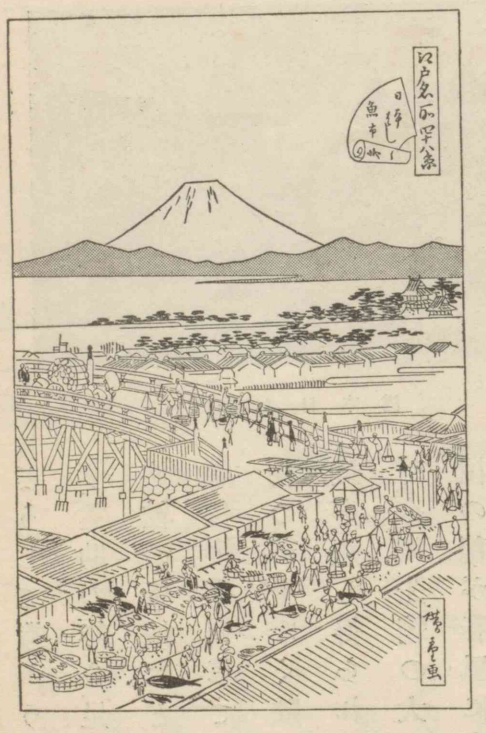


笹川臨風 名は種郎、東京市の人、明治三年生、文學博士。
島田 駿河國。
金谷 遠江國。
土山 近江國。
府中 今の靜岡市。
小夜の中山 遠江國。
日坂 同國。
鞠子 駿河國。
草津 近江國。
大井川 島田と金谷との間を過ぎて駿河灣に注ぐ、長さ四十六里。
天龍川 掛塚で海に注ぐ長さ五十五里。
荒井の渡 濱名湖の渡。

## 二一 東海道五十三次

笹川臨風

振出しは日本橋、上りは京、一つ餘れば大津へ戻る。島田・金谷は川の間間の土山雨が降つて、いづれもお休みの道中双六。名物は府中の安倍川餅、小夜の中山飴、日坂の蕨餅、鞠子のとろゝ汁、草津の姥が餅。百三十里の長亭・短驛、參覲交替の大道路、東に箱根八里の險、中途に大井・天龍・荒井の渡がある。交通機關は駕籠に輕尻馬、川



昔の日本橋

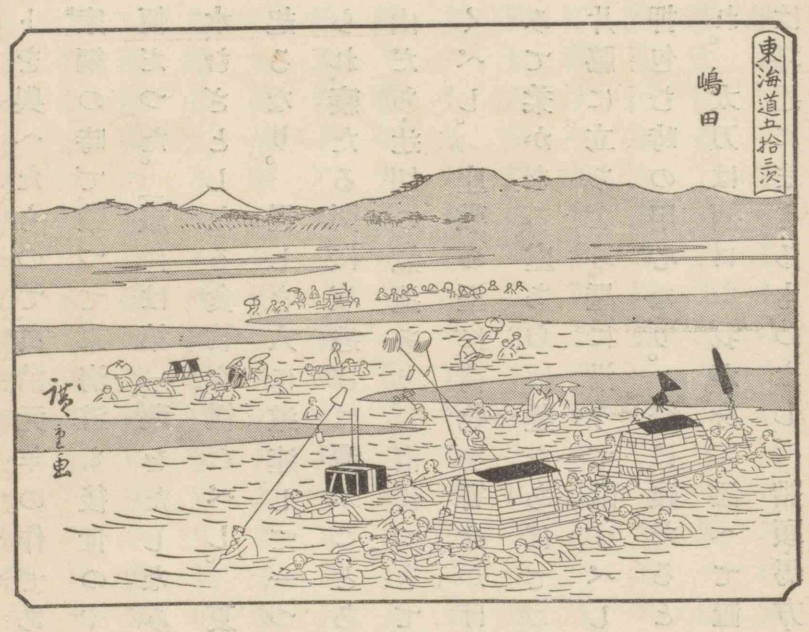
越には蓮臺・肩車ときまつてゐて、さて護摩の灰に取りつかれては、どうして撒かうかと胸算段並々ならず、雲助の無心、足弱の道連、長雨の川止、旅館の蚤・蚊などの難儀は、もとより食堂付寝臺列車で煙草を燻らしながら、何の苦もなく駛走する今日からは、到底夢想し得られないが、松並木の街道で、金紋先箱の大名行列に、奴が振る毛槍の穂が春風に靡いた太平の光景は、またとないよい圖畫だつた。旅行く人の心も長閑に、本陣・脇本陣の夕暮の賑ひ、十三泊の十四日入りで行く先々の名所舊蹟を探りながら、名物に旨い物なしとはいへ、宿々の珍味に舌鼓を打つたのは、所謂往

今の日本橋



淺井了意 京都の人、寛永六年歿、戯作家。

一九 本名重田貞一、號は十返舍、天保二年歿、戯作者。




大井川の渡（廣重筆）

時の東海道の旅行情調だつた。「お泊りならば泊らんせ」と聲喧しい宿場宿場の繁昌は、春風秋雨三百年間、海内交通大動脈の盛觀だつた。

東關紀行・海道記の昔はさておき、江戸時代に於ける東海道道しるべの最初の書物は、東海道名所記である。これは淺井了意の作と傳へられてゐて、一九の膝栗毛に少からぬヒン

萬治　後西天皇の年號。

家綱　家光の長子、延寶八年歿。

トを與へたもので、*萬治元年の作である。萬治といふと、四代將軍*家綱の時で、隨つて東海道も後世のやうに十分開けてゐず、諸事不便だつた。「旅には第一、藥をたしなみ、煩を防ぐを肝要とす。菓・冷水、むざとしたる食物を愼むべし。夏旅の霍亂は多くは食傷より起るなり。怪しき人に道連して、一つ宿に泊りて、荷物をすりかへられ、寢たる間に取逃げに遭ふことあり。夜深く宿を出でぬれば、山だち・辻切の氣遣あり。宿につきては、家の勝手、間道の要害見おくべし。座敷の壁に荷物を寄せかけて置くべからず。疊の落込みて柔かなる處あらば、疊をあげてこれを見よ。蚊帳の中よりは片脇に立ちより、壁に沿うて臥すべし。夜、盜人入つて、釣手を切り押包む時の用心なり。宵に寢たるところをば、脇へ替へて寢なほれ。太刀は柄口を我が身に添へて置くべし。さて第一の用心には堪忍にまさるものなし。船頭・馬方・牛遣などは、口がましく言葉



品川　武藏國。

原・蒲原・江尻　駿河國。

鄙しう我儘なるものなれば、これに負けじとする時は、必ず大事の基となる。金錢を二三文多く使へば、萬事早く調ふなり。扇・笠・巾着も高きところに置くべからず、忘れ易きものなり。旅籠錢は宵に渡すべからず、朝立つ時に渡すべし。錢を替ふるには、金錢を手放し、人を賴みて遣はしぬれば、惡しき銀にふりかへらるゝことあり。しるしを見せて錢を取寄せ、その後に渡すべし。道の左右に神や佛の堂社あらば、手を合せ心に念じて通るべし、守の神となり給ふなり。」などと、旅行の用心を說くほどに物騷であつた。必ずしも萬治頃だけがこんなに警戒を要したのではない。江戸時代を通じて、かやうな戒心は旅行に於ける必要條件だつたのである。

萬治頃の東海道では、馬の少い處が方々にあつた。「*品川・原・*蒲原・*江尻などは、いづれも馬少し。」とあり。「殊に原は道中一番の惡しき處なり。」といひ、蒲原は「こゝは甚だ馬の不自由なる處なり。殊

に乗掛の旅人には宿を借さず、たとひ宿借すとも、旅籠錢他所より一倍高し。その故に、宿の中に馬なし。もし馬を借らんといへば、宿より宿の問屋に案内をいうて、問屋の手形をとり、一里も二里もわき在郷へ馬を借りに行く故に、むづかしがるなり。これ問屋の悪しき故なりと、處のものいふなり。」と記してある。小夜の中山には深夜の旅行を戒め、酒匂には「追剝多し、夜深に出づべからず。」とある。鈴が森でも、「用心わろき道なれば、夜深く行くを慎むべし。」と注意するほどに、江戸近くにも拘らず危險區域だつた。

東海道五十三次に關する古往今來の書籍圖畫は、その數を知らないほどに澤山あるが、どうしても廣重畫の五十三次と、一九の膝栗毛とに止めを刺すといはねばならない。廣重と五十三次、一九と膝栗毛はどうしても離して考へられないほどに、いづれも高名なものである。

酒匂　相模國。

鈴が森　武藏國。

廣重　通稱安藤德兵衛、號は一立齋、德川末期の浮世繪師、安政五年歿。



交野　河内國、またや見ん交野のみのの櫻狩、花の雪散る春の曙。（藤原俊成）

嵐の山　朝まだき嵐の山の寒ければ、紅葉の錦着ぬ人ぞなき。（藤原公任）

關の清水　逢坂の關の清水に影見えて、今やひくらん望月の駒。（紀貫之）

駒もとゞろと　貢物たえずそなふる東路の、勢多の長橋音もとどろに。（平兼盛）

## 二二　落花の雪

落花の雪に踏み迷ふ、交野の春の櫻狩、紅葉の錦を着て歸る、嵐の山の秋の暮、一夜を明すほどだにも、旅寢となれば物憂きに、恩愛の契淺からぬ、我が古里の妻子をば、行方も知らず思ひおき、年久しくも住み馴れし、九重の帝都をば、今を限りと顧みて、思はぬ旅に出で給ふ、心の中ぞあはれなる。

交野の春（扶桑畫譜）

憂きをばとめぬあふ坂の、關の清水に袖ぬれて、末は山路を打出の濱、沖を遙かに見渡せば、潮ならぬ海にこがれ行く、身をうき舟の浮き沈み、駒もとゞろと踏み鳴

池田の宿（松岡映丘筆）

うねの野
近江より朝立ち來ればうねの野に、たづぞ鳴くあるあけぬこの夜は。（古今集）

時雨も
白露も時雨もいたくもる山は、下葉殘らず色づきにけり。（紀貫之）

不破の關屋
人住まぬ不破の關屋の板庇、荒れにし後はただ秋の風。（藤原良經）

らす、勢多の長橋打渡り行きかふ人にあふみ路や、世をうねの野に鳴くたづも、子を思ふかと哀れなり。

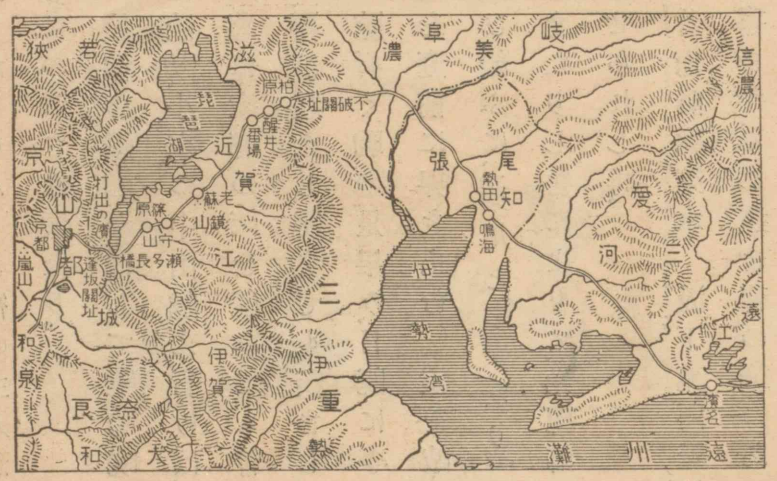
時雨もいたくもる山の、木の下露に袖ぬれて、風に露ちる篠原や、篠分くる道を過ぎ行けば、鏡の山はありとても、涙に曇りて見え分かず。物を思へば夜の間にも、おいその森の下草に、駒を駐めて顧みる、故郷を雲や隔つらん。

番場・醒が井・柏原、不破の關屋は荒れ果てて、なほ漏るものは秋の

なるみ潟　濱千鳥聲こそ近くなるみ潟、かたぶく月に潮や滿つらん。（藤原秀能）

元暦元年　壽永三年のこと。

重衡　平清盛の子、壽永四年歿。




雨、いつか我が身のをはりなる、熱田の八劔伏し拜み、汐干に今やな*るみ潟、傾く月に道見えて、明けぬ暮れぬと行く道の、末はいづくとほたふみ、濱名の橋の夕汐に、曳く人もなき捨小舟、沈み果てぬる身にしあれば、誰かあはれと夕暮の、いりあひ鳴れば今はとて、池田の宿に着き給ふ。

元*暦元年の頃かとよ、重*衡中將の東夷のために囚はれて、この宿に着き給ひしに、「東路の埴生の小屋のいぶせきに、ふるさといかに

戀しかるらん。」と、宿の主人が詠みたりし、その古のあはれまでも、思ひのこさぬ涙なり。

旅館の燈幽かにして、雞鳴曉を催せば、匹馬風に嘶えて、天龍川を打渡り、小夜の中山越え行けば、白雲道を埋み來て、そことも知らぬ夕暮に、家鄉の天を望みても、昔西行法師が「命なりけり。」と詠じつつ、再び越えし跡までも、羨ましくぞ思はれける。

隙行く駒の足早み、日既に亭午に上れば、乾飯進らするほどとて、輿を庭前に舁き止む。轅を敲きて警固の武士を近づけ、宿の名を問ひ給ふに、「菊川と申すなり。」と答へければ、承久の合戰の時、院宣書きたりし咎によりて、光親卿關東へ召し下されしが、この宿にて誅せられし時、

昔南陽縣菊水　汲下流而延齡　今東海道菊川　宿西岸而終命

と書きたりし、遠き昔の筆のあと、今は我が身の上になり、あはれや

命なりけり　年たけてまたこゆべしと思ひきや、命なりけり小夜の中山。（新古今集）

承久の合戰　承久三年。

南陽縣　支那南陽酈縣の故事、上流に菊があつて、その滴が流に落ち、それを飲んで皆長壽を保つたといふ。

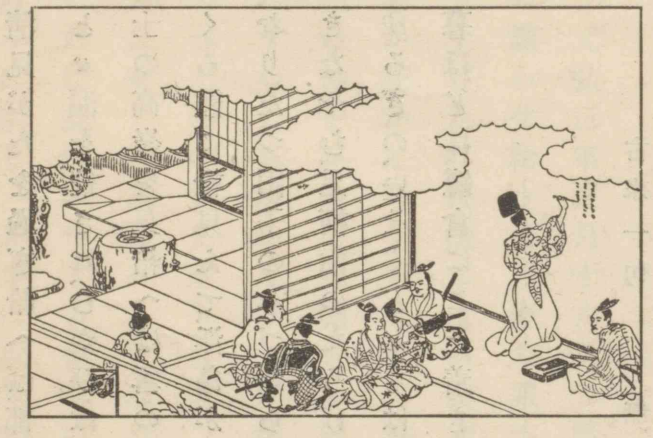


いとゞまさりけん、一首の歌を詠じて、宿の柱にぞ書かれける。

古もかゝるためしをきく川の　おなじ流に身をや沈めん

大井川を過ぎ給へば、都にありし名を聞きて、龜山殿の行幸の、嵐の山の花盛り、龍頭鷁首の舟に乘り、詩歌管絃の宴に侍りしことも、今は再び見ぬ夜の夢となりぬと思ひ續け給ふ。島田・藤枝にかゝりて、岡べの眞葛うら枯れてものがなしき夕暮に、宇津の山べを越えゆけば、蔦・楓いと茂りて道もなし。

昔業平中將の、すみかを求めんとて、東の方へ下るとて、「夢にも人に



菊川宿（東海道名所圖繪）

龜山殿　山城國葛野郡嵯峨の龜山離宮、今の天龍寺。

岡べの眞葛　歸り來るほどはなけれど朝露の、岡部の眞葛うら枯れにけり。（藤原爲家）

夢にも人に　駿河なる宇津の山べのうつゝにも、夢にも人にあはぬなりけり。（伊勢物語）

あはぬなりけり。」と詠みたりしも、かくやと思ひ知られたり。

清見がたを過ぎ給へば、都にかへる夢をさへ、通さぬ波の關守に、いとゞ涙を催され、むかひはいづこ三保が崎、興津・蒲原うち過ぎて、富士の高嶺を見給へば、雪の中より立つ煙、*上なき思にくらべつゝ、明くる霞に松見えて、浮島が原を過ぎゆけば、しほひや淺き舟浮けて、おりたつ田子のみづからも、うき世をめぐる車がへし、竹の下道ゆきなやむ、足柄山のたうげより、大磯・小磯見おろして、袖にも波はこゆるぎの、いそぐとしもはなけれども、日數積れば七*月二十六日の暮ほどに、鎌倉にこそ着き給ひけれ。

（太平記）

上なき思　富士の嶺の煙はなほぞ立ちのぼる、上なきものはおもひなりけり。（藤原家隆）

七月二十六日　後醍醐天皇の元弘元年。

古來一句　無死無生　萬里雲盡　長江水清。

俊基朝臣



## 二三　村上義光

元弘三年正月十六日、二階堂出羽入道道蘊、六萬餘騎にて大塔宮の籠らせ給へる吉野の城へ押寄す。*菜摘河の川淀より城の方を見上げたれば、嶺には白旗・赤旗・錦の旗、深山風に吹きなびかされて、雲か花かとあやしまる。麓には、數千の官軍兜の星をかゞやかし、鎧の袖を連ねて、錦繡をしける地の如し。峯高くして道細く、山嶮しうして苔滑かなり。されば幾十萬騎の勢にて攻むとも輙く落つべしとは見えざりけり。同じき十八日の卯の刻より兩陣互に矢合せして、入替へ〳〵攻め戰ふ。官軍は物馴れたる案内者どもなれば、此處のつまり、彼處の難所に走り散りて、攻め合せ開き合せ、散々に射る。寄手は死生知らずの坂東武士なれば、親子討たるれども顧みず、主從滅ぶれども物の數ともせず、乘越え〳〵、攻め近づ

菜摘河　大和國吉野郡にある、吉野川の支流。

金澤右馬助貞冬。

金剛山 河内國南河内郡。

金峯山 大和國吉野郡吉野村の東南。

く。夜晝七日の間、息をもつかず相戰ふに、城中の勢三百餘人討たれければ、寄手も八百餘人討たれにけり。況や矢に當り石に打たれ、生死の際を知らざる者は幾千萬といふ數を知らず。血は草芥を染め、屍は路徑に横たはれり。されども、城の體少しも弱らねば、寄手の兵多くは退屈してぞ見えたりける。

こゝに、この山の案内者とて、一方へ向はれたりける吉野の執行岩菊丸、己が手の者を呼寄せて申しけるは、「東條の大將、金澤右馬助殿は既に赤坂の城を攻め落して、金剛山へ向はれたりと聞ゆ。當山の事、我等案内者たるに依つて、一方を承つて向ひたるかひもなく、攻め落さで數日を送ることこそ遺恨なれ。つら〳〵事のさまを案ずるに、この城を大手より攻めば、人のみ討たれて落すことあり難し。推量するに城の後の山金峯山には、峻しきを憑んで敵さまで勢を置きたることあらじと覺ゆるぞ。物馴れたらんずる足



輕の兵、百五十人すぐつて歩立になし、夜に紛れて金峯山より忍び入り、愛染寶塔の上にて夜のほの〴〵と明けはてん時、鬨の聲をあげよ。城の兵、鬨の聲に驚きて度を失はん時、大手・搦手三方より攻め上りて、城を追落し、宮を生捕り奉るべし」とぞ下知しける。さらばとて、案内知りたる兵百五十人をすぐつて、その日の暮ほどより金峯山へ廻して、岩を傳ひ谷を登るに、案の如く山の峻しきを憑みけるにや、たゞ此處彼處の梢に旗ばかりを結ひつけ置きて、防ぐべき兵一人もなし。百餘人の兵ども、思ひのまゝに忍び入りて、木の下・岩の蔭に、弓箭を伏せ冑を枕にして、夜の明くるをぞ待ちたりける。

合圖の頃にもなりにければ、大手の寄手五百餘騎三方より押寄せて攻め上る。吉野の大衆五百餘人、攻口におり合ひて防ぎ戰ふ。寄手も、城の内も、互に命を惜しまず、追上せ追下し、火を散らしてぞ

勝手明神　吉野山中に在る。
藏王堂　吉野の金峯山の麓にある、藏王權現を祭る。

戰ひたる。かゝるところに、金峯山より廻りたる搦手の兵百五十人、愛染寶塔よりおり下つて、在々所々に火をかけて、鬨の聲をぞ揚げたりける。吉野の大衆、前後の敵を防ぎかねて、或は自ら腹を搔切つて猛火の中へ走り入りて死するもあり。或は向ふ敵に引組んで刺し違へて共に死するもあり。思ひ〳〵に討死をしける程に、大手の堀一重は死人に埋まりて平地になる。

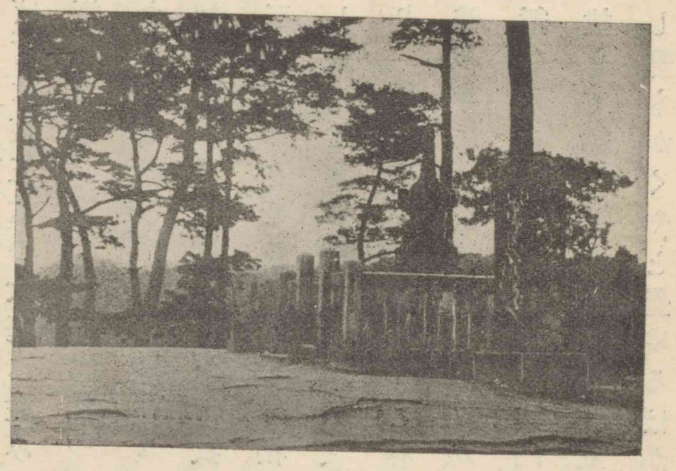
さる程に搦手の兵、思ひもよらぬ勝手明神の前よりおし寄せて、宮の御座ありける藏王堂へ打つて懸かりける間、大塔宮、今は遁れぬ所なりと思召し切つて、赤地の錦の鎧直垂に、緋縅の鎧のまだ巳の刻なるを隙間もなく召され、龍頭の冑の緒をしめ、三尺五寸の小長刀を脇に挾み、劣らぬ兵二十餘人、前後左右に立ち、敵の群がりて控へたる中へ走り懸り、東西を拂ひ、南北へ追ひ廻し、黑煙を立てて切つて廻らせ給ふに、寄手大勢なりといへども、纔の小勢に切り立



てられ、木の葉の風に散るが如く、四方の谷へさつと引く。敵引けば、宮は藏王堂の大庭に並み居させ給ひて、大幕打揚げて最後の御酒宴あり。宮の御鎧に立つ所の矢七筋、御頰先・二の御腕、二箇所突かれさせ給ひて、血の流るゝこと瀧の如し。然れども、立ちたる矢をも拔かず、流るゝ血をも拭ひ給はず、敷皮の上に立ち乍ら、大盃を三度傾けさせ給へば、木寺相模、四尺三寸の太刀の鋒に敵の首をさし貫きて、宮の御前に畏まり、「戈鋌、劒戟を降らすこと電光の如くなり。磐石、岩を飛ばすこと春の雨に相同じ。然りとはいへども、天帝の身には近づかで、修羅かれが爲に破らる。」と、はやしを揚げて舞ひたる有樣は、漢楚の鴻門に會せし時、楚の項伯と項莊とが劒を拔きて舞ひしに、樊噲庭に立ちながら、帷幕をかゝげて項王を睨みし勢も、かくやと覺ゆるばかりなり。

大手の合戰急なりと覺えて、敵身方の鬨の聲、相交りて聞えける

が、げにも、その戰に自ら相當ること多かりけりと見えて、村上彥四郎義光、鎧に立つ處の矢十六筋、枯野に殘る冬草の風に伏したる如くに折りかけて、宮の御前に參りて申しけるは、「大手の一の木戸、いふがひなく攻め破られつる間、二の木戸に支へて數刻相戰ひ候ひつるところに、御所中の御酒宴の聲すさまじく聞え候ひつるにつけて參つて候。敵既にかさに取上げて、御方の氣の疲れ候ひぬれば、この城にて功を立てんこと今は叶はじと覺え候。いまだ敵の勢をよそへ廻し候はぬ前に一方



村上義光の墓



より打破つて、一まづ落ちて御覽あるべしと存じ候。但し跡に殘り留まつて戰ふ兵なくば、御所の落ちさせ給ふものなりと心得て、敵いづくまでも續きて追つかけ參らせんと覺え候へば、恐ある事にて候へども、召されて候ふ錦の御鎧直垂と御物具とを下し賜はつて、御諱の字を冐して敵を欺き、御命に代り參らせ候はむ。」と申しければ、「宮いかでかさる事あるべき。死なば一所にてこそともかくもならめ。」と仰せられけるを、義光詞を荒らかにして、「かゝる淺ましき御事や候。漢の高祖滎陽に圍まれし時、紀信、高祖の眞似をして楚を欺かんと乞ひしをば、高祖これを許し給ひ候はずや。これ程にいふかひなき御所存にて、天下の大事を思召し立ちけることこそうたてけれ。はや、その御物具脫がせ給ひ候へ。」と申して御鎧の上帶を解き奉れば、宮げにもとや思召しけむ、御物具、鎧直垂まで脫ぎ替へさせ給ひて、「我若し生きたらば、汝が後生を弔ふべ

し。共に敵の手にかゝらば、冥途までも同じ岐に伴なふべし。」と仰せられて、御涙を流させ給ひ乍ら、勝手明神の御前を南へ向ひて落ちさせ給へば、義光は二の木戸の高櫓に上り、遙かに見送り奉り、宮の御後影の幽かに隔たらせ給ひぬるを見て、今はかうと思ひければ、櫓の狹間の板を切落し、身をあらはにして、大音聲を揚げて名のりけるは、「天照大神の御子孫、神武天皇より九十五代の帝、後醍醐天皇第二の皇子、一品兵部卿親王尊仁、逆臣の爲に亡ぼされ、恨を泉下に報ぜんが爲に、只今自害する有樣見置きて、汝等が武運忽ちに盡きて、腹を切らんずる時の手本にせよ。」といふまゝに、鎧を脫ぎて櫓より下へ投げおとし、錦の鎧直垂の袴ばかりに、練貫の二つ小袖をおし膚脫いで、白く清げなる膚に刀をつき立て、左の脇より右のそば腹まで一文字に搔切つて、腸摑んで櫓の板になげつけ、太刀をくはへて、うつ伏になりてぞ伏したりける。大手搦手の寄手こ



天の河
大和國吉野郡。

れを見て、すはや、大塔宮の御自害あるは。われ先に御首を賜はらむとて、四方の圍を解きて一所に集まる。その間に、宮は引違へて天の河へぞ落ちさせ給ひける。

南より廻りける吉野の執行が勢五百餘騎、多年の案内者なれば、道をよぎり、かさに廻りて打留め奉らむと取籠むる。村上彥四郎義光が子息、兵衞藏人義隆は、父が自害しつる時、共に腹を切らんと二の木戸の櫓の下まで馳せ來りけるを、父大いに諫めて、「父子の義はさることなれども、しばらく生きて宮の御先途を見はてまゐらせよ。」と庭訓を殘しければ、力なく、しばらくの命を延べて宮の御供にぞ候ひける。落ち行く道の軍、事既に急にして、討死せずば宮落ち得させ給はじと覺えければ、義隆只一人踏み留まりて、追ひて懸かる敵の馬の諸膝薙ぎては切りすゑ、平頸切つて刎ね落させ、つづら折なる細道に、五百餘騎の敵を相受けて、半時ばかりぞ支へた

る。義隆、節、石の如くなりといへども、その身金鐵ならざれば、敵の取卷きて射ける矢に、義隆既に十餘箇所の疵を被りてけり。死ぬるまでも、なほ敵の手にかゝらじとや思ひけん、小竹の一群ありける中に馳せ入りて、腹搔切つて死ににけり。

村上父子が敵を防ぎ、討死しけるその間に、宮は虎口に死を御遁ありて、高野山へぞ落ちさせ給ひける。（太平記）

高野山　紀伊國伊都郡。

古陵の松柏天飈に吼ゆ　山寺春を尋ぬれば春寂寥
眉雪の老僧時に帚くことを輟めて　落花深き處に南朝を說く

藤井竹外



隱士松翁　吉野朝時代の人、傳未詳。
左馬頭　楠正儀。
住吉の戰　大阪市住吉區にある、正平七年正儀賊將細川顯氏と此の地に戰つて之を破つた。

## 二四　熊王の發心　隱士松翁

大夫判官赤松光範が津の國のかためなりけるとき、左馬頭正儀に度々はかられけるを、口をしく思ひこめてすごしたりけるに、いにし住吉の戰に討たれて失せし宇野六郎といひしが子に熊王といひけるが、まだをさなきとき、光範にいひけるは、「正儀は我が爲にも親の敵にて候へばいかにもしてうち侍らん。河内へこえて正儀に仕へ侍らんに、をさなく候へば、などか心をゆるし申さぬことのあるべき。たとひ心をゆるすことのあらずとも、七とせ八とせ程も仕へ候はば、そのうちには、討ちぬべきたよりのいかでなからん。御暇をこそたまはらめ。」と涙を流せば、光範もいとあはれと思ひながら、「をさなければ、敵の國へやらんも心もとなし。又は、命にかはりて討たれし者の子なれば、かたみとも思ふべければ。」と

阿倍野　今の大阪市住吉區天王寺町内。
赤坂の城　河内國南河内郡赤坂村。

強ひてとゞめ給ひけれども、「少し大人しくなりなば、よも近づけ給はじ。をさなくありなんとき參りてこそ。」としきりに望みければ、力及び給はで、常に身をはなち給はざりし刀を賜ひて、「これにて本意とげよ。」とて、阿倍野まで人あまた添へて遣らせけるに、それよりは我にひとしき童一人を具して、赤坂の城に行きて、そのほとりに佇みてありけるを、兵庫介忠元が見つけて、「いかなる人におはすらん。」と尋ねければ、「我は大夫判官光範の侍にて宇野六郎といひける者の小子に、熊王といへる者にてこそ候へ。父にて侍る六郎は、去にしとき、住吉の戰に討たれて候ふを、一門にて侍る備後守が我を追ひ討ちて、領地を奪ひ候へども、光範と心を合はせ候へば、せん方なくて、いかなる寺へも入り侍りて、僧法師にもなり、父の跡を弔ひ候はんがためにさすらへ侍り。」といひけるを、あはれと聞きて、まづ我が方に伴なひてさま〳〵勞りて、後に、正儀に有りつる



明くる年　正平十三年。
和田和泉守　和田正武。
吉野殿　後村上天皇。

事を語りて、「をさなくは候へど、心のさか〳〵しくて。」など申すに、あはれがり給ひて、召寄せ給へり。

もとより情ある人なりければ、熊王も思ひつきて、親の仇をも忘れにけるにや、よく宮仕へにけり。十五ほどになりければ、「河内の國にてすこしなる處をしらせん。」といひけれども、「いかで、恥ある一矢をも射さぶらひてこそ。」とて辭しにけり。

明くる年の春、父が七めぐりに當りけるに思ひつけて、「こよひ正儀を討ちて父の手向にもし、光範の心をも安め奉らん。」と思ひたちてありけるに、その日、御前に召して、「けふは吉日にてあるなれば、元服せよかし。」とて、和田和泉守に髻あげさせて、和田小次郎正寛と名のらせ、吉野殿より賜はりける鎧を賜ひければ、涙を袖にかけて喜ぶ。

夜に入るまで正儀の御前に在りけるが、またふと思ひ出でて、「討

ち奉らんならば今宵こそ。」と思うて、膝を押直して、正儀に目を懸くれば、年頃の情深かりし事、今日の元服の事など思ひ續けて、「いかで情なく討ち奉らん。」と思ひかへして、心を鎭むれば、「父の敵といひ、譜代の主君の仇といひ、一方ならねば。」と思ひさだめけれども、何心もなく渡らせ給ふ有樣を見ければ、御いたはしくて、堪へかねけるにや、廣緣に出でて、聲を揚げて泣き叫ぶを、人々も正儀も覺束なく思ひ給うて、障子開き見給へるに、伏沈める樣の、たゞには見えずありければ、「いかに。」と問はせ給ひければ、ありつる心のうちを申して、「とにかくに、君のため、先君のため、父のために、みづから死なんより外は候はず。」とて、刀を取りなほせば、ありつる人どもみな涙に暮れてありながら、「いかでさはあらん。」と取附きてはたらかせねば、力及ばでその刀にて髻押切り、往生院にて形を替へ、君より賜はせたる名なればとて、正寛法師とぞいひける。

往生院 河内國中河内郡枚岡南村に在る。



寺の傍に草の庵を結びて、「もしも心の變ることのありもやせん。」とて、往生院の門の外へは出でずして行ひてありけり。光範より賜はせける刀は、ありし有樣をくはしく書き添へて返しけりとかや。いとあはれなりけることにこそ。

（吉野拾遺）

元服と云ふ事、元ははじめとよむ、服はきものとよむなり。幼き者成長して始めておとなの着物を着るを元服といふなり。元服の時、加冠の役、理髮の役といふことあり。加冠とは烏帽子をとりて被せる人なり。ゑぼし親のことなり。理髮とは童子の髮の先を紙に包みて髮の先を切す人なり。理髮の人髮はやしてさて加冠の人ゑぼしを取りて被せるなり云々、官位せぬ人は何丸何若などいふ幼名をやめて何太郎何次郎などと大人の名を付くるなり。之を烏帽子名と云ふ云々。

（貞丈雜記）

徳富猪一郎
號は蘇峯、熊本縣の人、文久三年生、貴族院議員、文章家。

逗子
相模國三浦郡逗子町。

養神亭
逗子町に在る旗亭の名。

三崎街道
三浦郡に在る、逗子、葉山を經て三崎に通ふ街道。

鐙摺山
一名軍見山、逗子町の南方。

# 二五　月明の夜友に

徳富猪一郎

いつの間にやら秋風身に泌む頃と相成り候。憂なきこの心は物の悲しさを覺えず、面白く、嬉しく、樂しく暮し居り候

徳富猪一郎

この八月二十六日は、舊暦の七月既望に當りたれば、晩餐の箸を投じ、大いなる麥藁帽を戴き、悠々然として、逗子の濱邊を過ぎ、養神亭なる友人の寓を訪れ候。さて相携へて三崎街道に沿ひ、鐙摺山に至り候。この山は、頼朝が三浦出遊の時、こゝにて鐙を摺りし故に、かく名づけたりと、口碑に存し居り候。

文明の恩澤は、この山の絶壁を切り下げ、海に沿うて、馬車をも馳



小坪岬
鎌倉材町木座飯島崎の南にある海岸、逗子町に屬す。

雪舟
畫家、室町時代の北宗派の白眉。

森戸川
葉山の堀内の森戸神社の側にそそぐ小川。

せ得べき大道を開き候。位置は小高くして海上に斗出し、逗子灣を隔てて小坪岬と相對し、恰當の觀月臺に候。やがて、月は鐙摺山の背より出でくれば、海上蒼茫として、只此處、彼處に月影の反射するを見るのみ。當面の富嶽は、雪舟の描ける淡墨畫の如く、恍惚としてまことに夢の如くに候。不思議なるかな、かねて見覺えもなき奇峯、突兀として富嶽の周圍に立並ぶ。こは上州なる妙義山の飛び來れるにか、さても面白き事よと、篤と吟味致し候へば、雲にてありしもをかしく候。

我等二人は、興に乘じ、聯歩快談、早くも天地深寂たる森戸川の橋上に至り候。月はまさに我等の帽簷にきしり上り候。清光は隈なく相模灘より伊豆の島々を照らし候。海上に天あり、天上に海あり。月は海上にあるか、波は天上にあるか。月と共に涌き來る高潮は、寄せて、捲きて、碎けて、散りて、黄金の波となり、白金の浪とな

森戸神社　森戸明神といふ、祭神は大山祇命。

名島　森戸明神祠後の海上十二町許にある小島。

井上梧陰　名は毅、熊本の人、子爵樞密顧問官、文部大臣となつた、明治二十八年歿。

り、眞珠の濤となり、錦繡の瀾となり、天地の心をいひやぶる雄大玄妙なる音樂を奏し候。

森戸川を渡りて右に折れ、亂松の間を蛇行すれば、やがて森戸神社なり。松林帶の如く海上に連なり、林盡きて巖聳ゆるところ、祠堂あり。幾多の巉巖を隔てて、名島と相對し候。先づ此の最寄の絶景の一にて候。これよりは井上梧陰先生の別墅もほど近し。ついでなれば、門を敲くも一興ならんとて、捷路を取りて濱邊に下り行き候。

月は益、冴えて、潮は愈、高く、殊にこの邊は奇巖怪石亂立したれば、濤聲凄じきばかりに候。ふと見れば、かなたの巖上に、大いなる鷺の如きもの佇み居り候。近づけば人なり。更に近づけば思ひきや、梧陰先生ならんとは。

かくて先生に導かれて濱邊の裏門より入り、榻を庭陰に移し、婆



御最後川　一名田越川、逗子町と櫻山村との境を流れて海に入る。

六代御前の森　御最後川の畔にあつて、平維盛の子六代御前（三位禪師）の斬られた所。

娑たる松間の月影を眺めつゝ、江湖の雜談に打興じ、覺えず時刻を移し候ふ中、生憎や怪雲月を掠め來り候。「いざさらば」と辭して濱邊に出づれば、黑紗の如き雲の絶間より、月こそあらはれて候へ。

道傍の村舍、今は死よりも靜かに眠り候。冷やかなる風は、そよそよと御最後川の汀の蘆洲を吹き渡りて、髮ともなく面ともなく掠め來り、轉、物淋しく感ぜられ候。黯澹たる雲に隈どられたる月光は、青白く六代御前の森の上にかゝり候。御最後川の橋上より眺むれば、かすかなる火光一つ二つ。これ漁燈か、これ鬼火か。宿に歸りて戸を敲くをりしも、細雨霏々として帽簷を撲ち候。草々不宣。

（現代名文集）

高山樗牛
名は林次郎、山形縣の人、明治三十五年歿、文學博士、文藝評論家。

# 二六　月夜の美感

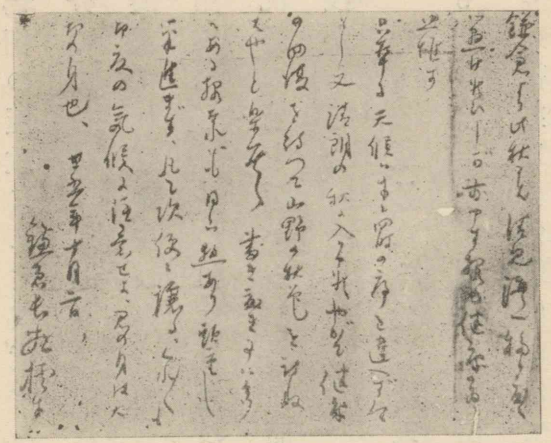
高山樗牛

月夜の美感を成せる最も大いなる要素、凡そ三つあるが如し。一は、月の光なり。二は、この月夜の光に照らされたる夜の世界なり。三は、この月夜の光景が觀者の心に惹起す所の聯想なり。この外にも、時と處と、觀る人の心とによりて、それ〴〵の原因あるべけれど、一般に所謂月夜の美感は、右の三要素より成れりと見るを得んか。

月光の表示する色相は青なり。青の表示する感情は沈靜なり、安慰なり、冥想なり。色相上の赤の表示する所と全く相反す。赤は活動の色なり、煩惱の色なり、意慾の色なり。是を喩ふれば赤は太鼓の響の如く、青は横笛の音の如し。赤は爛漫たる牡丹の夏に傲れるが如く、青は瀟洒たる水仙の冬に勝へたるが如し。月光の青は二つの點に於て普通に見る所の青と異なれり。第一の點は



鎌倉より此秋には清見灣へ移り度く心懸け候ひしが前申す樣の健康の爲と思惟す
只幸に天候は常に四時の序を違へず今としし又清朗の秋に入り申候やがて健康の回復を待ちて山野の秋色を訪ねばやと樂居候書き度き事は多々ある樣なれども目下熱あり頭重し筆進まず凡て次便に讓るくれ〴〵も印度の氣候に注意せよ君の身は大切な身也
三十五年十月二日
鎌倉長谷　樗牛



高山樗牛筆蹟

その光力の弱きことなり。換言すれば普通の青に一分の暗を帶ぶることなり。第二の點はその色の淡きことなり。換言すればやゝ白みを帶びて朧ろげなることなり。凡そ黑色若くは黑色の表示する所は解くべからざる祕密なり。沈靜の至極卽ち寂滅・死滅なり。今青に加ふるに一分の暗を以てす。これ青をして一分黑に近づかしむるなり。取りも直さず、その表示する所の感情をして更に一層の神祕と寂滅とを加へしむるなり。是に於てか、月光の青は、普通に較ぶれば、そが表示せる沈靜・安慰・瞑想に於て一段の深さを加ふ。若しそれ色の淡

きは其の色の白きを加へたるの謂なり。白はあらゆる色相の不在を證するもの、卽ち色にして色にあらず、そが表示する所は無體無相の極致にして、畢竟する所、非實在の標號なり。今靑にして一分の白を加ふと云ふ。これ非實在に向つて一歩を轉じたるもの、換言すれば、實在の靑に加ふるに一分の假象性を以てせるものと謂ふべし。是の如く、月光の靑色は、一面に於ては其の暗きが爲に沈靜の情を深からしめ、他面に於ては、その淡きによりてその性を淺からしむ。

かゝる微妙なる色彩は、天地を裹みて一色たらしむるなり。山も川も草も木も田野も市街も人間も、凡そ天地間のあらゆる物は、この微妙なる色彩によりて一抹せられ、均しく共同の色相を現ずるなり。月を觀る人、彼は夢みたるに非ず。されど彼の觀る所の薄暗き、靑白き世界は、實在のものと何等か異なれるものあるを感



ぜざるべきか。さなきだに、靑は沈靜、瞑想悲哀の色なるを、彼の心は、その暗く且淡きによりて一層の感を深うすることなかるべきか。寂寞たる夜間の光景と相待ちて、幽渺名づけ難き月夜の安慰と瞑想と悲哀と、かくの如くにして生ぜらるゝにあらざるか。

若しそれ、夜の世界は意慾競爭の休止を告ぐべき世界なり。人は一日の活動を現世に奉じたる後、茲に退いてその精神の安慰を求むるなり。勞れたる夕陽の西山に沈むは、人生日々の戰鬪に對する休戰の合圖なり。人はこゝにその鋒を收め、その冑を脫いで、靜かに平和の世界に憩はんとするなり。されば夜は活動の時に非ずして靜思の時なり。煩悶の時に非ずして安慰の時なり。人はパンの外に糧あるが如く、晝の外にも世界あり。人生の慰藉と幸福とは、必ずしも名利の世界に限ると思ふなかれ。人は活動に生きるが如く靜思にも生き、渴仰に生くるが如く詠歎にも生き、光

明に生くるが如く暗黑にも生き、現世に生くるが如く過去にも未來にも生き、現實にも生き得べし。夜こそはこの人生の大いなる半面を時間の上に暗示せるものならずや。されば夜の世界は男に非ずして女なり。散文に非ずして詩歌なり。哲學に非ずして宗教なり。太鼓の響に非ずして横笛の音なり。かゝる夜に於て月の光を見るこそ嬉しけれ。さなきだに、靜思に沈み、詠歎に傾ける人の、そが青白き夢の如き光に洗はれたる心のいかに嬉しかるべきぞ。月の光は卽ち夜の冥想の空しからざるを證するなり。六欲煩惱の巷の外にも、尙人の求むべき安慰の存することを證するなり。

されど月光の色と、夜の世界との外に聯想なる第三の要素あり。月夜の美感はこれによりて一層深く、且一層痛切に感ぜらるゝなり。月光の色相が吾人の心に惹起す感情は、その內容に於てこそ



月見れば云々
月見れば千々に物こそ悲しけれ、わが身ひとつの秋にはあらねど。(大江千里)

沈鬱、悲哀なれ、その形式に於ては不定にして、そが沈鬱、悲哀の對境については、何等明確なる意識あるなし。たゞ何となく思ひ沈み、たゞ何となくうら悲しきのみ。譬へば、野も山もともに月の一色に塗抹せらるゝが如く、我が心にもまた一種悲哀の調子の響き渡るを覺ゆるなり。もし人の心に、快濶と沈鬱との兩面ありとせば、沈鬱の一面はこの悲哀の響に共鳴して、優しき、悲しき、哀れ深き、その他これに類せるもろ〳〵の情緒に開發の機會を與ふ。「月見れば千々に物こそ悲しけれ」とは、這般の心情を歌ひたるものなるべし。されど、かくして起されたる感情は、初の中こそ定かならざれ、そが開發するに隨ひて、終には一箇の具象的形式を得ざれば已まざるべし。而してこの定かならざる感情に具象的形式を與ふるものは卽ち聯想なり。

聯想にも種類あり。觀る人の性格、閱歷、境遇によりてもとより

一様ならざるべきも、何人の念頭にもまづ浮かぶべきは自然と人生との對比なるべし。この世にはあるまじき月の光の清らかなる、青茫たる天空の心ゆくばかり美しく且限りなき、山川の依稀として無言の靜寂を保てる、平和のおもかげ悠久のしるし、何れか現世の好對比にあらざるべき。始なく終なき自然の美しき大觀に面すれば、人生の事業のいかに哀れにまた見すぼらしく見ゆべきぞ。名利・得失・成敗・生死、あはれ葉末の露にも較ぶべき五十年の短

月夜の美觀



生命を擧げて、この煙火の巷に齷齪し、悲喜することの、寧ろ滑稽にも見ゆべきなり。かくの如きは、月夜の感慨中最も普通に見るところにして、また吾人の道德的感情の上にも最大なる影響を及ぼすものなり。

自然と人生との對比について最も著しき聯想は、過去の追想もしくは遠人の思慕なるべし。

江畔何人初見月　江月何年初照人
人生代々無窮已　江月年々望相似

江畔の句　唐の張若虛の「春江花月夜」中の句。

こは何人も知れる張若虛が詩中の句にあらずや。天地の悠久に比して人生の須臾なるを歎ぜるが中に、過去世の追憶を交へて、感慨のうたゝ永きを覺ゆ。殊に李太白が有名なる「把酒問月」の詩の如きは、最も痛切にこの感慨を現せりと謂ふべし。

青天有月來幾時　我今停杯一問之

李太白　名は白、唐代の大詩人。

人攀明月不可得　月行却與人相隨
今人不見古時月　今月曾經照古人
古人今人若流水　共看明月皆如此
唯願當歌對酒時　月光長照金樽裏

我が眺むる月は、昔の人にも眺められたる月なりとの意識は、ただに過去世の觀念を實にして、同情の强さを增す力あるのみならず、月そのものに對しても、また一種の親しき他ならぬ感情を覺ゆべし。されば、月を介して、我は直に古人の心情を感得する想あるなり。「國破れて山河あり。」といふとも、しかも天上の明月の長へに渝らざるに較べなば、山河もなほ桑滄の變あるを免れじ。されば人生古今の盛衰を瞰下して、しかも自らは一分の隆替をも感ぜざる月が、過去世の追憶に際して最も有力なる媒介者たるは極めて自然のことなるべく、月によりて遠人を懷慕する情もまた同一



の起原を有すべし。

過去世の追憶、遠人の思慕、此等は月夜の聯想として、恐らくは何人も覺えあることならん。この聯想は精神全體の沈鬱悲哀なる後景と相應じ、月夜の感慨に一層の深さを加ふる力あり。もろもろの詠歎の糸を辿りて、一種の幽渺なる安慰を吾人に與ふべし。

（樗牛全集）

月夜禁垣の外を歩す　柴野栗山

上苑の西風桂香を送る　承明門外月霜の如し
何人ぞ今夜清涼殿　一曲の霓裳御觴を奉ず

坪内逍遙
名は雄藏、名古屋の人、安政六年生、文學博士、文學者。

長良堤
攝津國西成郡豐崎村（今大阪市東淀川區）を流れる長柄川の堤。

大野
修理亮治長。

片桐
豐臣氏の忠臣、市正且元、元和元年歿。

## 二七　長良堤の訣別

坪内逍遙

本舞臺一面の道具幕、長良堤の一部の心にて、深霧を透して、おぼろに大阪城の天守見ゆる體。夜明方。幕あけば、大野の家來白倉權六、鐵砲を携へたる雜兵大勢を連れ、立ちかゝり居る。

トばた〳〵にて、同じく大野の家來神崎治右衞門、向ふ揚幕より駈け出で來る。白倉すかし見て、

白「神崎氏でござるか。

神「白倉氏か。片桐主從は程なくこれへまゐりまするぞ。御油斷めさるな。

白「心得申した。昨日彼が屋敷を圍み、お討取あるべきお手筈なりしが、修理亮樣の御智略にて、わざと彼等の英氣を拔き、落ち行く途中で討取る魂膽。



神「ねらひの的は且元一人、三十餘挺いつときに彼を目あてに切つて放たば、討洩らすことはよもあるまい。

白「ものども必ずぬかるまいぞ。

皆々「心得ました。

トこの時鐵砲の音して神崎に中り、よろしく落ち入る。これにて一同驚きあわつ。

途端に、下手より片桐が家來本村等を先に家來大勢、いづれも陣立にて拔きつれて出で、

本「かくあらんとかねての手くばり、主君を守護する我々が……

皆々「遺恨の太刀先受けて見よ。

ト切つてかゝる。大野方はあわて騷ぎ、すぐ逃げて入る。片桐方追うて入る。

トこれより床の淨瑠璃になる。

淨「晨雞再び鳴いて殘月薄く、征馬しきりに嘶いて行人出づ。はや別れ行く橫雲や、殘んの星を一つづつ、鐘が消し行くいなのめの、

市ノ正　片桐且元。
主膳ノ正　片桐且元の弟貞隆、寛永四年歿。
茨木　攝津國、片桐氏の封地。
長門守　木村重成、元和元年歿。
三右衞門　今村氏、且元の家臣。
清藏　本村氏、且元の家臣。

長良堤に秋たけて、一叢蘆に風黑く、ありあけ凄き淀川みづ。

ト よき頃に道具幕を切つて落せば長良堤の體。こゝに平舞臺上手よき處に、市ノ正床几に腰をかけ、その後に馬丁二人附添ひ控へ居り、下手よき處に主膳ノ正つくばひ、その下手後に家來大勢控へ居る。

市「討手來らざれば自裁も叶はず、人々の諫に從ひ茨木へ落去とは決せしものの、お家の後事を長門守に託しおきたく、先刻ひそかに三右衞門を木村が邸へ走らせたり。我はこれにて返事を待たん。御身は我に代り手勢を差配し、一足先へ參らるべし。

主「仰ではござりますれど、油斷ならざる折柄、たゞお一人こゝにざあらんは心もとなし。

市「いやそれはいらぬ遠慮。我等が警護は、かねて清藏等に申含めおいたれば氣遣なし。（ト向ふを見て）おゝ、あの人影は、



淨「詞の中に遙かに足音。

ト この時今村三右衞門揚幕より急ぎ足にて出で來り、すぐ本舞臺へ來て、

今「はつ、申上げまする。長門樣にはおつつけこれへ。

市「大儀々々。しからば弟、御身は先へ參られよ。その方もともに。

ト 今村へこなし。これにて主膳ノ正は一同へこなしあつて、市ノ正に會釋し、皆々を引連れ、二重に上りて上手へ入る。

淨「顏見合せてぜひなくも、主膳を先に一同は、心殘して行き過ぐる。

淨「あとには何か一思案、寂然として駒立つる、長良堤の有明がた、見る目も暗し遠方に、おぼろ〳〵と現るゝ、名に大阪の四衢八街、悄然として淋しげに、一棟高く聳えしは、

ト この文句の間に、市ノ正は馬に跨りて二重に上り、向ふを見ることあり。

市「おゝ、あれこそはお天守ぢやなあ。

ト 向ふを見てよろしく思入。

故殿下　豐太閤。

南山不落と祝はせられ、千萬年の後までもと、築かせられし大阪城、故殿下かくれさせ給ひて後、まだ程もなきに礎ゆらぎ、諸大名の心は離れ〳〵、今にもあれ事起らば、金城湯地もそのかひなく、

淨「いひかけて聲くもらせ、こらへず馬より飛び下り、

ト文句の通り。

これしかしながら、不肖且元愚昧にして先見なく、姑息因循して大事を誤り、關東の罠に罹つて、御遺言に戻り奉るけふの仕合せ、不忠ともいひがひなしとも思召されん。それを思へばこの腸はちぎるゝばかり、償ひがたき不臣の罪は、あの世でお詫仕らん。お赦しなされて下さりませ。

淨「人目なければやゝしばし、不覺の涙に暮れけるが、やゝあつて心づき、

我ながら不覺の至。大罪のお詫よりも、差懸かるお家の安危…



長門守にはいかにせしか。はて心もとなき……

ト いひつゝ馬を二重上手物蔭へ引き行きて繋ぐ。

淨「すかしながむる折こそあれ、殘霧つんざき一さんに、馳せ來る木村長門守。

ト 向ふ揚幕より長門守馬に乘りて駈け出で來り、木舞臺の方をすかし見て、

木「市、正どのに候な。

市「長門どの、待ち兼ねしぞ。

ト 二重を下る。

淨「いふ間に駈け寄る轡づら、右手に下り立ち顏見合せ、詞はなくて

そゞろにも、まづ袖ぬるゝ朝露や。

ト 木村馬より下り立ちながら且元と顏見合せ、しばらくは無言にて落涙のこなし。やがて下手の柳の木へ馬を繋ぎて、舞臺の中央に進み、市、正と向ひ合ふ。

木「最早豐臣の御社稷もいよ〳〵末となつたるか。棟梁と賴む貴

御母公　秀頼の母淀君。

織田入道　常眞、俗名信雄。

渡邊　内藏介。

殿まで、佞人・讒者の毒舌に逆臣の汚名を受け、空しく退身せらるるとは、

ト愁の思入ありて、市ノ正は傍の木の根に、重成はよろしくその下手に蹲みて、

某圖らぬことよりして、はしなくも御母公の御嫌疑蒙り、出仕を遠慮のその間に、思ひがけぬ珍變あり。つゞいて貴殿に御討手と、昨朝承り大いに驚き、すぐにお表へ參入すれば、城内議論涌くが如く、織田入道殿の日頃に似げなく、激論の末、席を蹴立て唯今退座ありしとばかり。後は亂脈・無法の評定。御母公の威を笠に着る大野・渡邊等が我意・暴慢。この上は彼等を一刀に切つて捨て、腹搔切らんと再びまで、刀の柄に手は懸けしが、貴殿が日頃の教訓を思ひ出して、無念を忍び、無實と知つて忠臣を救ひ得ざりしいひがひなさ。

淨「悔むを且元押しなだめ、



九度山　紀伊の國伊都郡の村、高野の北谷にある。

眞田安房守　名は昌幸。

幸村　元和元年大阪の戰役に戰死した。

市「いしくも堪忍せられしぞや。かねてもしば〳〵申せし如く、お家の大仇は彼等にあらず。鼠輩のために命を捨つるは、大忠臣の所爲にあらじ。大切なるはお家の後事。某退去のこと關東に聞えなば、大亂破裂せんは目前なり。この上はたゞ偏に籠城の計畫こそ肝要なれ。

木「して、籠城の計とは、何をもつて先とすべきか。

市「されば、今お城に、兵糧金銀は乏しからず。まつた猛將・勇卒にも事缺かねど、得がたきは智謀の將なり。某これを慮り、萬一の備をなしおいたり。

木「して、その智謀の將と申すは。

市「今九度山に隱れ忍ぶ、信州上田前の城主、眞田安房守が二男左衛門ノ佐幸村こそ、故太閤の恩を思ふ智勇兼備の良軍師、先年お身方となしおいたり。合戰の駈引は一切かの仁に任せられよ。

木「して、また、籠城となつたる曉、敵を防がん手配は。

市「その儀もかねて地理を考へ、出丸なくては叶ふまじと、先年紀州の山々より、材木あまた切り出させ、お船入に積みおいたり。また つた湊口のお藏には、年頃力めて購ひおいたる、數萬俵の糧米あり。籠城數年に渉るといふとも、なほ支ふるに餘りあるべし。

木「これに加へて故殿下が、貯へおかれし數萬の金銀近年御費用嵩むといへども、なほそこばくの餘財あり。

市「甲冑・兵具も乏しからず。

木「城は名におふ南山不落。

市「忠臣悉く心を一にし、あの堅城に立て籠り、偏に君家を守護するときんば……

木「たとひ關東の老奸雄、利をくらはせ諸大名をなつけ、六十餘州の兵を盡し、四方八方より攻め寄すとも……



速見 通稱出來丸、夏の陣に戰死した。

御宿 名は正倫、また武田政友に作る。

和久 名は宗豐、通稱又兵衛、夏の陣に戰死した。

市「なか〳〵三年四年がほどには、攻め落さんこと難かるべし。

木「まつた若年には候へども、愈、軍始まりなば、我又一方を承り、速見・御宿・和久等とともに、忠義を金鐵の堅きに比し、命はもとより鴻毛の、吹き飜さん白旗は、祖先佐々木が四つ目結、君臣・將士心を一にし、千變萬化の手を盡さば、金石もまた透りぬべし。利欲に集まる關東勢、なに退くるに難かるべきや。この上は仰に從ひ、このこと君に言上なし、直に軍の手配せん。御心安かれ市〳〵正どの。

市「ほゝ、賴もしゝ〳〵。たゞ大切は上下の一致、必ず忠勤勵まれよ。……とはいひながら往時に照らし、成り行く末を鑑みれば……

木「御母公の御氣質、社鼠に等しき大野・渡邊。……

市「上、御發明に渡らせらるれど……

木「讒佞これを覆ふがゆゑ……

市「地の利はあれども人の和なく……

大御所　徳川家康。

木「故太閤が御威武に、をのゝき震ひ打伏せし、六十餘州の民草も……

市「天の時にや大御所の、おのづからなる德風に、いつしかなびく世の有様。

木「いかなればかくまでに、御運傾く西天の……

（トこの内あちこちにて雞の聲。市ノ正落ちかゝれる月を見やりて。）

市「有明の影うすれつゝ……

木「東天紅と八面に、かしましく鳴くくだかけは……

市「新日東天に昇るといふ……

木「世の成行の……

淨「影なるか。

淨「ぜひもなき世の有様と、暫しは愚痴にをちかた寺、耳驚かす鐘の聲、夜はほの〴〵と明けにけり。

（トこの時鐘の音聞ゆ。夜明の心。なほ處々に雞の聲。）



市「後事をそこもとに託せし上は、もはや思ひ殘すこともなし。

木「して、貴殿にはこれよりして……

市「居城茨木へひとまづ立ち越え……

木「と仰あるは受取りがたし。もしやこれが今生の……

市「あゝいや、潔き最後をだに遂ぐべき機會を失ひし市ノ正が命の拙さ。お詫の名こそ立ため、償ひがたき身の大罪、この身一つをとやかくと、千筋に迷ふ心の中。

（いひかけて氣をかへ、）

いや、なに、心ばかりは、この後とても、君の御影に附添ひ參らせ、萬一にも杞憂的中なし、大事去りなんその時には……

木「某とても事破れて、御運の末となる時は、この世の思ひ出、奉公をさめ、關東勢が眞中に、縱横無盡の血戰なし、華々しく討死なさん。

市「おゝ勇しゝ潔し。某長らへ世にあらば、その目覺しき働をば、餘

所ながら見物なさん。なほ再會は黄泉にて。

木「さやうでござらば市、正どの。

市「隨分堅固で……

木「貴殿にも……

淨「惜しきが中の生別離、まことやこれに比ぶれば、黄蘗は蜜にや似たるらん。駒引寄せて式退や、見返りがちに乘り移る。秋さび月毛乘る人の、心やいかに片手綱。

ト この内木村は柳の木に立寄りて馬の紐を解く。市、正は鐵扇を開きて二重の上手へ合圖をする。

ト 本村清藏二重の上手より以前の馬を引きて出で、平舞臺へ下る。これにて市、正も木村も馬に乘る。

市「さらば。

木「さらば。



淨「と西東、見送る方に霧や立つ、眼や曇るおぼろ〳〵、嘶く駒の聲はして、この世に殘す面影は、また見ぬ影とぞなりにける。

ト この内市、正は二重の上へ、木村は平舞臺の下手へと馬を進め、互に見返ることよろしく。(幕)

(桐一葉)

修訂 女子國文新選 卷七 終

昭和四年三月二十七日
文部省檢定濟
高等女學校國語科用

昭和三年十月十五日印刷
昭和三年十月二十日發行
昭和四年三月十五日訂正再版印刷
昭和四年三月二十日訂正再版發行

修訂女子國文新選 全十册

| 卷數 | 定價 |
| --- | --- |
| 自卷一至卷十 | 各金四拾參錢 |

昭和五年度臨時定價 金七拾錢

著作權所有

不許複製

編者 吉澤義則

發行兼印刷者 京都市上京區丸太町通堀川西入西丸太町百七十一番地 星野敬一

發行所 京都市上京區丸太町通堀川
電話西陣三〇三五番 四八三七番
振替口座穴阪四九四九一番 星野書店